
珠巡り

桜咲 雪紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

珠巡り

【Zコード】

Z6534W

【作者名】

桜咲 雪紅

【あらすじ】

数百年に一度、正統継承者が生まれそれが代々受け継いできた珠の封印が解かれる。その瞬間から珠取が始まる。

天を操れる球。
海を操れる球。
地を操れる球。

この珠に選ばれし正統継承者は、十六歳になると同時に通称“珠狩”と名乗る一団に命を狙われる。正統継承者は“珠守”とともに珠を守り抜き封印しなくてはならない。

珠を全て奪われると先祖が封じた“モノ”が蘇つてしまつらしい。

さて、前置きはこれくらいにして、よいよ珠巡りの始まりです。

プロローグ

パチパチパチ
ガツシャーン ガラガラ

建物が焼けていく音に加え、崩れる音も加わった。この家が焼け落ちるのも時間の問題だろう。

「いいかい。桜、龍護」
りゆうご

男が膝を折つて話しかけているのは、十歳にも満たない火のせいか瞳の紅い少女と一・二歳年上と思しき瞳の色が濃い少年だ。よく見ると、少女は掌に納まるくらい小さい小さい珠を持っている。色はこの空と同じように漆黒だ。

「この珠を持つて今すぐ逃げるんだ」

「嫌だよ。父さんも母さんも皆も、一緒に行こうよ」

少女は泣きながら父の服を引っ張る。少年も辛そうに顔を歪ませている。

「後から必ず行く。約束する。だから今は逃げるんだ。気づかれないうちに」「やだよ」「行くぞ。桜」

龍護が桜の手を引く。桜は何度も躊躇ながら叫んだ。

「離してッ。離してよ！ 龍兄」

バタバタ暴れると龍護は血を吐くような声で

「行かなきや・・・いけないんだ！」

桜はギュッと珠を握り締めた。瞳には今にも零れそつなほど涙が溜まっている。

「絶対追ってきてね！！！」

桜の悲痛な叫びも建物の崩れ落ちる建物の音にかき消されていく。

「正統継承者は逃げたか」

「追うぞ。あの珠を全て集めるのだ
「天空家末裔を追え！」

涙で滲んだあの光景を、私は生涯忘れないだろう。
深く強く心の深奥に刻み込まれたこの光景を。

そして、突きつけられるだろう。

自分の命は自分の大切に思っていた人々の命と引き換えに生かされたのだと。

「・・・・・」

何故皆は私を逃がすために命を捨てたのだろう。
何故私は正統継承者に選ばれてしまったのだろう。
何故大切な者だけこの手をすり抜けていくのだろう。

「もうやだ・・・」

思わずもらしたこの言葉は本音だ。もうこれ以上自分のせいで自分
の大切な居場所を亡くすなど耐えられない。

「大丈夫だ。俺は絶対に死ない。や・・・誓うから」

約束すると言い掛け別の言葉に言い換える。だが、今の桜にはどんな言葉も届かない。音として耳に届いたとしても心が拒絶しているのだ。それを知りながら龍護は呟く。

「お前は俺が護つてやる」

第一章 “空の珠”を持つ者

「桜！一氣に行け。道作るから
「りょーかい。綾、ミスるなよ」

「そつちこそ」

軽口を叩きながら「ゴールを目指してドリブル開始。こうなつたらもう止まらない。

ダムダム

蒸し暑い熱気に包まれた体育館にドリブル音が木靈す。

一対一の状態から相手を抜き、綺麗な放射線を描き「ゴールに向かっていくボール。

パシュ　ピー

「二十対二十一。勝者一年」

歓声が上がり、一年チームはほしゃぎあへる。桜はついでに顔を顰めながらもどこか嬉しそうだ。

「桜！あんたホントに未経験者？詐欺じゃないの？」

二年の先輩達が順繰りに瞳が紅玉色の桜と呼ばれた女の子の今は薄い黒の髪をわしゃわしゃかき回す。桜は「背が縮んじゃいますよ」と抗議の声を上げているが、聞いちやいねえ。

「はあ～疲れた。キャプテン、休憩の号令を出して下さいよ～。疲れました」

キャプテンこと朝霧 美穂は呆れたように肩をすくめて

「わかつたわかつた。十分間休憩」

「さつすがキャプテン。物分りがいい」

ポカリを飲みながらキャプテンの背中を叩く。桜も壁に寄り掛かりながら水分補給をしつつ、時計を見る。そろそろか。

「桜！行ぐぞ」

来た。一般の人人が思う『カツコイイ』を表現したような黒い瞳と黒い髪の男が腕を組み、柱にもたれかかってる。

「キヤプテン、私は早く帰らないと

『キヤーッ！！！龍護くーん。』に向いて～』

うわあ、出たよ。龍兄の追っかけ集団。といつことば・・・

「陽菜^{ひな}の方向いて～』

来たよ。龍兄追っかけ常習者の入江 緋奈、瞳が黄色で髪が金髪の一歩手前。今日も一段とすごい格好だ。こんな奴に好かれて龍兄も可哀相に。

「桜！何ボケーッとしてんだ。帰るぞ」

「待つてよ。着替えなきや」

「一分ですませる」

無茶言うなーと言いながら更衣室に入る。

二分後、黒のスカートに半袖のワイシャツ。その上にアイボリーのベスト赤と白のラインが入った青いリボンといった涼しげな格好で出てくる（男は半袖のワイシャツ、黒いズボンアイボリーのベスト青いネクタイという格好）。と龍護は一言

「遅い」

「つるさいなあ。」これでも急いだんですよーだ

鞄を龍護に向かつて投げて靴を履く。その間も『龍護くーん』やら「陽菜の龍～一緒にか～える」等の黄色い声が飛び交う。鼓膜が破れそうだ。

桜が龍護に駆け寄ると、陽菜が龍護の自転車の後ろに乗っていた、我が物顔で。

ウザッ、てか退けよ。

思わずそう言いかけて慌てて口を押さえた。

「お前ウザいよ。てか邪魔。退け」

あ～あ。言っちゃった。

陽菜は悲劇のヒロインのように涙を流しながら「龍・・・酷い」

「酷くて結構。俺らは急いでんだ。桜、さつさと乗れ。こんなに構つたら千夏^{かずか}と翔^{しょく}に迷惑がかかる」「それもそうだね」

桜が乗ったのを確認した瞬間、物凄い勢いで自転車は去つて行つた。

「桜と龍、遅いな」

「しょうがないよ。一人とも部活やつてるんだから。気長に待とうよ。お兄ちゃん」

「俺だつて龍と同じ部活やつてるよ。お前だつて『道部じゃんか』腹減つた」と愚痴りつつ目の前の料理に手を伸ばす。髪は薄い茶髪で瞳はブラウンの千夏は、素早く料理を髪が焦げ茶で瞳が夕空色の翔太の手の届かないところへ避難させて

「つまり食い禁止つていつも言つてるでしょ」

「ケチケチすんなよ」いいじゃんか

「ダメなものはダメ」

そうこうしているうちに時刻は七時になつた。

「今日はいつもより遅いね」

「命日だからな」

「そつか。もうあの日から六年経つたのか。紅蓮の夜、七月十五日から」

「わわっ」

荒れ果てて草が好き勝手生えている階段を上つていいく二人。今の声は草で足元が見えず足を踏み外した桜の声だ。

「つたく。なにしてんだ、お前は」

龍護が空に伸ばされた桜の手を掴む。桜は子供のように頬を膨らませ

「どーもありがとう」

「どういたしまして」

人の悪い笑みを浮かべてる龍護。桜はその笑みに舌を出す。

それから一分後、ようやく目的地に着いた。

桜は九年間。龍護は十年間過ごした天空家跡地だ。その天空家も桜と龍護だけ

「

黙つて立ち尽くす二人。ここで一人は大切な者を亡くしたのだ。言

葉など出るはずがない。桜は紅い太刀の形をしているネックレスを握る。いまでも鮮やかに甦る言葉がある。『これはお前を守ってくれる大事なモノだ。肌身離さず持つていなさい。この珠と共に』『はい。父さん』

首にかけている紐を引っ張り出し、その中から今の夜空と同じ闇に包まれた珠が出てきた。それを両手で握り締め瞳を閉じる。『・・・の・・・』

はっと目を開ける。いつだつたか自分の名前の由来を聞いたときに言っていた言葉だ。

『あなたの名前の由来？そうね・・・桜はね、暖かすぎる場所では咲かないの』

不思議そうに首を傾げている桜の頭を撫でながら続ける。

『寒さに必死に耐えて、耐え続けてそれでようやく綺麗な花を咲かせるの。そして、一瞬で儂く散っていく。私はそんな桜の花が大好きなの』

『よくわかんない』

『桜の身にも辛い出来事が降りかかる時が必ず来る。でもね、その辛さを乗り越えて綺麗な花を咲かせて。そして、出来れば桜にひとつ大切な居場所ひとたちを見つけて。桜にとつて大切な居場所ひとたちを見つけられたら、その居場所をずっと護りなさい』

『？はい、母さん』

その時は意味がわからなかつたが、大切な人達が出来た今ならわかる。

階段を下り、帰りながら龍護に話しかける。

「龍兄」

「ん？」

「私、美優ちゃん達大切だよ」

「そりだらうな。あいつらといふと楽しそうに笑うもんな、お前」「美優ちゃん達を護りたいよ」

「そりか・・・お前もようやく護りたい存在が出来たか」

後半は口の中で呟く。月の光が一人を照らしていた。

七時半。

「ただいがほ・・・・」

龍護の語尾が訳のわからない言葉とすりかわった。原因は玄関で仁王立ちしている人物と関係がありそうだ。

「遅いッ！今何時だと思ってんだ！バカ兄妹」

「だからって・・・・」

龍護は額を押さえながら怒りの滲んだ声を出す。背からは怒りの炎ほむらが立ち上る。固く握り締めた拳など今にも殴りかかりそうだ。小刻みに震えている。

「辞書投げる奴がどこにいる！…バカ翔」

「ただいま。翔兄」

桜が龍護の後ろから顔を出す。理由は簡単。龍護が百七十五センチ。桜が百六十センチ。身長的にそうしないと見えないのだ。

「お帰り、桜。ずいぶん遅かつたけど寄り道してたの？」

千夏がリビングから顔を覗かせて訊ねてくる。桜は靴を脱ぎ捨て鞄を放り投げながら

「バカ兄貴が道間違えやがつてさ。散々な目にあつた

「誰がバカ兄貴だ」

龍護が鞄を桜の頭に振り下ろす。

ドスツ

もろに決まった。

桜は瞳に涙を浮かべてしゃがみ込む。龍護は勝ち誇ったように嘲笑する。

「妹いじめてなに喜んでんだよ。大人気ないぞ、龍

翔太が龍護の肩に肘を置いて注意する。龍護は眉間にしわを寄せて翔太の顔に肘を入れる。

「ハイハイ。玄関で揉めてないでまずは夕飯食べよっよ」

「そうだった。やつと夕飯食えるんだ」

「今日は千夏が当番か。なに作ったの?」

「お兄ちゃんのリクエストの親子丢だよ」

その言葉を聞き、龍護と桜は争つようリビングへ走る。千夏は苦笑しつつ

「ちゃんと手を洗つてね」

「ヘイヘイ」

「返事は一回」

「ヘイ」

午前七時。ピピピピピ。

目覚まし時計のなる音で田が覚めた。

「朝か・・・・」

未練がましく布団に横たわる体を無理矢理起こし、伸びをする。手早く制服に着替え、鞄を引き摺りながら階段を下りる。洗面所に寄りさつぱりしてからリビングへ。

「はよ~」

リビングに入り挨拶すると、キッチンから千夏が笑顔で「おはよう、桜。もう少しで弁当出来るから寝坊助共を起こしてくれない?」

「オッケー。朝食のパンテーブルに出しといて」

わかった。という千夏の声を背に再び一階へ。階段を上って一番端にある翔太の部屋に行き、一応ノックをして

「起きろ~翔兄。朝練ないからつていつまで寝てるつもり」

電気をつけカーテンを開けると、翔太は唸りながら身を起こす。

「もう朝か・・・寝足りない」

「さつさと着替えて歯磨いて朝食食べな。千夏が待ってるよ

「あいわ~」

気の抜けた返事をして立ち上がる。次は龍護の部屋だ。翔太の部屋の向かい側が龍護の部屋だ。ちなみに龍護の隣が桜で、その向かい側が千夏。

龍護の部屋はノックなしで入る。電気をつけカーテンを開け

「おら、さつさと起きろ。バカ兄貴」

容赦なく布団を引っ張り、揺さぶる。翔太とはえらい違いだ。龍護は寝ぼけながら桜を見て

「…………おふあよう、桜」

「制服に着替えて歯磨いて朝食食え。学校遅れるよ」

「ハイハイ」

適当に返事をし、桜の田の前で着替え始める。桜は龍護の腹に蹴りを決め

「私が出てつたから着替えろ！－この変態兄貴」

捨て台詞と共に扉を力一杯閉める。顔が若干赤いが、怒りのせいといふことにしどこつ。

一時間後。

「おはよう。桜ちゃんと千夏ちゃんとお兄さん方」

「はよース。四人とも」

「おはよう。渚、美優ちゃん」

桜は自転車を引きながら一人がいる方へ走る。

「真海は相変わらず眠そうだな」

翔太は苦笑いを浮かべている。渚は「そんな事ないですよ」と言っている。が言ったそばから大あくび。これじゃあ説得力に欠けることこの上ない。

「ここで話してないで学校行かない？」

千夏の一言で一同は学校へ向かつ。

私の名前は天空 桜。三珠高校一年で“空の珠”に選ばれし者。まあ正統継承者って事かな。どうやって継承者がどうか見分けるのかというと、正統継承者は十六歳になると左腕に紋章が現れる。天なら翼、海なら波、地なら双葉、といった感じ。

「しつかし暑いな」

私の隣で文句を言っているのは兄の天空

龍護。

私立三珠大学付属

三珠高等学校一年。龍兄とは言つてゐるけど血縁関係はない。口が悪く、性格も悪い。髪も瞳も黒。

「文句言つてる暇があんなら、一秒でも早く学校に着くようにしろ」
そう言つて龍護を追い抜かしたのは夕空 翔太。しょうた私立三珠大学付属

三珠高等学校一年。瞳は夕空色で髪は焦げ茶。龍兄の親友兼悪友。

龍護とあり得ないほど気が合つ。

龍護は抜かされたのが悔しいらしく、スピードを上げて抜かし返している。バカ兄貴一人による無意味競争が始まった。信号が変わったので桜たちは自転車を止める。

「行つちやつたね。お兄ちゃん達」

呆れたような顔をしつつ私の横に自転車を寄せてきたのは夕空 千夏。私立三珠大学付属三珠高等学校一年。私の親友兼悪友。瞳は薄い夕空色で髪は薄い焦げ茶。いつも微笑んで可愛いし優しい。ぽけーっとしてると横から

「桜ちゃん。信号変わったよ」

「桜がぼけーっとしてると笑いを誘うね」

慌てて信号機を見ると歩行者信号は青に変わっている。自転車を漕ぎ出す。

今私に信号が変わったことを教えてくれたのが菊地 美優。みゆ私立三珠大学付属三珠高等学校一年で“海の珠”に選ばれし者。今は青みがかつて見える髪に瞳は青玉。髪は普段は黒だ。右足に大きな傷がある。冷静で腹黒。でもなぜか親友関係にある。我ながら謎だ。

あと三人ほど紹介したい人がいるけど学校に着いちゃつたからまた後で。

自転車を自転車置き場に止め、昇降口へ歩いていくと龍護と翔太が

待っていた。

「遅いぞ、お前ら」

「ちゃんとついて来いよ」

「無茶言わないでください。桜と千夏ちゃんならまだしも私と美優ちゃんは運動系全般苦手なんですから」

渚が若干息を乱しながらぼやく。その横で美優はお茶を飲んでいる。

「まあまあ。早く教室行こつよ」

桜が渚の肩を叩く。渚は大きく深呼吸をして息を整えてから「そうだね」とだけ言い下駄箱に向かう。私と千夏と美優と渚は1年A組の下駄箱。龍護と翔太は1年E組の下駄箱だ。

階段を上つていくと上から声が降ってきた。

「おっはよ～。龍護君と翔太君・・・と桜ちゃんと千夏ちゃんじやん。おはよ」

「山下先輩。おはよ！」「桜、こんな奴にいちいち挨拶なんかしないでいいよ」

翔太が桜の言葉に被せるように口をつぶして捨てる。龍護は引き攣った笑みを顔面に張り付けている。

私は話しかけてきた人は山下 大地先輩。髪は茶髪で、瞳は朱色。なぜか翔兄とはそりが合わない。私もちょっと苦手だけど。

「ほら、お前らはさつさと教室に行けよ」

「わかった。じゃあまた昼休みにね」

手を振りつつ四階へ向かつ。

第一章 桜と仲間達

教室に着き、ドアを開けて自分の席に荷物を置く。すると田の前に影がさした。顔を上げると、見知った顔だ。この学校の半数以上の女子生徒が想いを寄せる男子。

「おはよう、恭哉」

と挨拶すると

「おはよ、遅かつたな。寝坊か？」

「私じゃないけどね」

「またお前の兄貴か」

口元を隠して笑っているこの男。天空 恭哉。きょうや 髪は明るい茶髪で、瞳は赤色。幼馴染だ。何故か異常に女子に人気がある。告白が絶えないそうな・・・。だが今まで誰とも付き合つたことはないらしい。隠し事をしていると何故か必ず問い合わせられる。以外と鋭い。中間テストの結果は一位。期末ではどういう結果になってるか楽しみだ。龍護と翔太と同じように日々追っかけ女共に追われている。ファンクラブも出来てるそうな・・・。龍兄とはいつも喧嘩している。

「せ・ん・ぱ・いでしょ？また外周させられるよ。天空」

「しょがないよ。学習能力というものが欠落してるんだから」

桜の後ろから渚と千夏が恭哉に注意する。続いて美優も

「違うよ、渚さん、千夏ちゃん。天空君は外周がしたいんだよ」「したくないから」

即座に否定するが一人はまつたく聞く耳を持たず「じゃあ龍護さんに教えてこよう、行こう美優ちゃん、千夏ちゃん」「いいよ」「親切だね、渚さん」

「勝手に話を進めんなあ！」

恭哉の訴えも空しく、三人が再び教室の外に足を踏み出した時「うおっと、あつぶね～。って渚と天空と菊地じゅん。おはよう。んで、どしたの？こんなとこ（出入り口）で突っ立つて」

「おはよう、悠紀君」

「男バスは朝練あつたんだ。お疲れ様、悠紀君」

「おはよう。朝練お疲れ様、悠紀」

渚と千夏と美優にぶつかりそうになつたこの人、名は真海 悠紀。
髪は漆黒で瞳は空色、中学からの親友だ。新入生代表に選ばれ、一
学期中間テストの結果でぶつちぎりの一位を獲得した頭の良い親友。
根は真面目。恭哉とは犬猿の仲。生徒会書記。

「待つてよ～ 悠紀君。足速すぎ」

遅れてやつてきたのは菊地 一夜。髪は黒で、瞳は深緑、額に小さ
な傷がある。気弱で頼りない幼馴染。でも、やる時はやるしつかり
者。

「おはよ、一夜。えらく疲れてんな・・・男バスつてそんなにきつ
かつたつけ?」

桜が記憶を探りながら訊ねる。練習量は女バスよりも多かつたが、そ
こまできつくなかったはず。疑問はすぐに解決した。

「体育館からここまで（教室塔）まで結構遠いじゃん？そこを遅刻
しないよう全力で走つてきた」

悠紀が爽やかに言う。渚と美優が小声で「体力馬鹿」「違うよ、渚
さん。筋肉馬鹿だよ」と言い合っている。文化系の部活動の二人に
してみれば、ここから教室塔まで走る体力は生憎持ち合わせていな
いのだ。

キーンコーン

「起立、礼」

『おはようござります』

日直の号令と共に生徒達が挨拶をする。

「おはよう。今日からテスト返しが始まるが、ちゃんと問題用紙は
持ってきたか？国語、保健、理科のだぞ。以上かな」

そう言うと礼もそこそこに歩いていった。

「最悪だ～。よりによつて保健が返つてえくるなんて」

桜は机に突つ伏す。保健のテストは記号問題も語群問題もなかつた。更に加え、桜は保健の勉強を当日やつたのみ。赤点をとつてもおかしくない要素満載だ。

頭を抱えつつ唸つていると、頭上からクスッという笑い声と共に「大変そうだね。まあ私は国語が返つてくるから気分がいいんだ。今回こそ百点満点取つてやる」

「渚ちゃんは国語トップだもんね」

「渚さんは頭いいからね。私なんか全滅だよ」

顔を上げると渚と千夏と美優が立つていた。桜は落胆の滲んだ声で「三人とも頭よくていいよねえ。私なんか馬鹿すぎて即退学になるかも」

「なに言つてるのさ、桜ちゃん。私の方が即退学だよ。頭悪すぎで」

「そんな事ないよ。美優ちゃんは学年順位十位だったじyan」

「そうだよ。美優ちゃんは頭いいよ。なんたつて一学年中十位なんだから」

千夏と桜がうんうん頷きあつていると、美優が

「・・・・一学年中三位の千夏ちゃんと四位の桜ちゃんに言われて
もねえ」

「あんなのまぐれだよ。たまたま社会と理科がよかつただけで」

「私もだよ。偶然数?と英?がよかつただけで・・・」

二人は困つたように笑いながら頭を搔く。そこへ

「今日は俺が勝つ。覚悟しあけよ。悠紀

「負け犬の遠吠えかい?見苦しいね

「んだと」

「二人とも、やめなつて」

言い合いながらやつてきた恭哉と悠紀。その二人の後ろには言い合
いを止めようと無駄な努力をしている一夜がいる。

「やめな、悠紀。時間の無駄遣いだよ。それにそんな恭哉に付き合
つてると悠紀までバカになっちゃうよ」

渚が冷たく言い放つ。恭哉は指を鳴らしながらにっこりと笑みを浮

かべ

「いい度胸だね、真海さん。数？赤点まであと一つで」
すねを押されてぴょんぴょん跳ね回る。渚が恭哉のすねを蹴ったのだ。力一杯。

その格好をみて思わず吹きだした桜と悠紀と美優。一夜は恭哉の格好を見て笑いそうになつたが、さすがに氣の毒と思ったのか咳払いに変える。千夏は吹きだしこそしなかつたが口元が笑みの形になつている。

「今度その続きを言つたら……腹に決めるから」

「渚、ナイス。今度アイス奢つてやる」

「どうも、三段ね」

結託している二人。恐ろしいコンビだ。この二人だけは敵に回したくない。

「おい、そこの七人。座れ～テスト返し始めるぞ」

十一時。

キーンゴーン

「やつと終わつた」

ため息と共に言葉を吐き出す。それと同時に私の人生も終わりそうだ。十五年か。長かつたような短かつたようドカッ

「痛つて～。・・・なにしやがんだよ、渚」

ギロリと睨みつける。桜の思考を遮つた音の正体は渚の鞄だ。もつと正確に言つと、渚の鞄が桜の頭に当たつた音だ。

「人の昼寝の邪魔しやがつて・・・」

肩をふるふる震わせて渚に殴りかかるつとした瞬間、桜の目の前に美優が・・・

「うおつと・・・危ね・・・」

ほつと息を吐き出す、危うく美優を殴り飛ばすところだつた。ふう〜。

「あつ桜ちゃん。今日は部活あるの？」

「いや、ないよ」

「そりが、それは好都合。俺らのところ来い」

「はつ？」

突如割り込んできた声の主は、恭哉だ。といつ」とは
「全力でお断りさせていただきます」

顔の前で×印を作つてみせる桜。

「いいじゃんかー暇なんだろ?」

「暇だけど嫌だ」

「なんだよ。マネージャーの癖に」

マネージャーという単語に唇の端を引き攣らせる桜。確かにサッカ
ー部のマネージャーだ。やるといつた覚えはこれっぽっちもないが。
「私がいつサッカー部のマネージャーやるつて言つた? 無理矢理マ
ネージャーにさせられただけなんですけど」

「いいからいいから。行くぞ」

腕を掴まれ強制連行。桜は必死に抵抗しながら渚に叫ぶ。

「美優ちゃんは今日部活ないけどお前はあるんだろ!?一緒に帰ろ
う。四時半に正門で待ち合わせなー!」

「いいけど・・・サッカー部つて七時までやつてるんじや・・・」

「逃げる」

きつぱり言い切つた桜。桜は「こつと決めたことは絶対やり抜く。と
いうことは必ず五時には正門に来るだろ!」

「わかった! 四時半に正門で」

渚と別れ、階段を下りながら桜はずつと黙り込んでいた。この後ア
イツに会うと思うだけでテンションが下がる。いや、人生の運気も
下がる気がする。

「どうしたんだよ。さつきからずつと黙り込んで」

恭哉が顔を覗きこんでくる。いつもなら「なんでもない」とか「う
つさいなあ。私の勝手でしょ」等の言葉を返すのだが、今はそんな
氣力すらない。自然とため息が出る。すると、恭哉は桜の額を触り
「熱でもあんのか? お前がそんなに沈んでんのも珍しい」

恭哉なりに心配してくれているらしい。桜は作り笑いを顔面に張り

付けて

「…………何でもない。ちょっとテストの結果が悪くて」
いつもより元気のない声だ。でも今は「これで精一杯。クラスメイト
なら騙せる程度の笑顔と声だろ?」。恭哉も多分気づかな「お前……
やつぱり変だぞ。無理すんな」

「そんなことないよ」

作り笑いを見破られたことに驚きつつもなんとか否定する。これ以上心配かけたくない。

「怪しい」

疑いの眼差しを向けられるがここで「やっぱ気分悪い」等の事を言つたら龍護の耳にも入る可能性大だ。それだけは避けなければ。とりあえず

「速く部活行かないと先輩に怒られるんじゃないの?」

話を逸らすことにした。これ以上追求されたら言つてしまいそうだ。

「そうだった。早く行かねえと」

そう言って走り出そうとして、まだ私の手を掴んでいることに気づき

「お前、今日は早めに帰つて寝ろ。元気ないと逆に怖い」

酷い物言いだ。桜は無言の抗議をする。恭哉は微苦笑して

「ううう。その方が桜らしい」

上手く乗せられたようだ。

「じゃあ俺行くわ。気をつけて帰れよ」

そう言いながら凄いスピードで走り去つていった。残された桜はさて、どうしたものかと考え込む。お腹も減つたしどこかでお弁当食べようか。それとも家に帰ろうか。あつ、待つた。渚と約束してたんだっけ? 確か天文部は自由参加だったはず。

「よし、渚と一緒に飯食つて一緒に帰ろ? 決定」

こうと決めたときの桜の行動速度は速い。あつといつ間に特別等の屋上にある天文部の部室へと走つて行った。

所変わつてグラウンド。

「なあ、おかしいと思わないか」

グラウンドの隅に植えてある木の下で弁当を食べている男一人。声の主は翔太だ。

「何が?」

「何がつて・・・お前も気づいてんだろう? 真海が十六になつたのにアイツ等が動かないなんて」

それは俺も思つていた。アイツ等が十六になつた真海を狙わないのはおかしい。それどころか見張つてもいい。いつたい何を考えてるのや!」

「真海が十六になつた時から俺達六人は真海と桜と美優の誰かと一緒に帰るよつにしてきた。なのに今まで誰もアイツ等と出会つてい

い」

「そうだな。だがもう一つ問題がある。真海は十六になつたのに紋章が現れてないし、珠も目覚めてない。この事と真海が狙われない理由と何か関係があるんじやないか?」

二人は重いため息をついた。わからない事だけでイライラする。無言で昼食をかきこんでいると、恭哉がやってきて

「こんなとこにいたんですねか。探しましたよ」

「遅いぞ、恭哉。外周させるぞ」

「それだけは勘弁してください」

恭哉は顔の前で手のひらを合わせる。そして龍護が「まあいいだろう」と言つたのを聞いて腰を下ろす。弁当を食べつつ空を見て

「今日も暑いっスね。そういうえば先輩達テストはどうでしたか?」

「まあまあだつたよ」

龍護が着替えながらどうでもよさげに答える。翔太は苦笑して

「俺はちょっとやばかったかな。お前は?」

「俺は結構よかつたですよ。今回こそ悠紀じゃなくて俺が学年順位一位になる」

拳を握る恭哉。今回こそあの偉そうな面をぶん殴つてやる。

意気込んでいる恭哉はさて置き、一人を戻す。

「とにかく何があるかわからんねえし警戒を強めといつ」「それが妥当だな」

「ところで恭哉。桜は？」

龍護がまだ悠紀への意気込みを熱く語っている恭哉に問うと、恭哉はガツツポーズの格好で一時停止をし、答える。

「桜なら今頃・・・」

「よし、今日は誰もいないみたい。久々に静かに過ごせる」
ここは特別等の屋上。天文部の部室の前。塀に寄りかかった渚は風にあおられる髪を鬱陶しそうにかき上げ弁当を広げる。たまにはこうやって静かに食事を取るのも悪くない。むしろ一人のほうが気楽だ。

「いただきます」ドタドタドタ

渚のいただきますと誰かが階段を駆け上がってくる音が重なる。渚は手を合わせた格好で止まり、扉に目を向ける。こんなに騒がしくやつてくる人物を私は二人しか知らない。一人は男共と一緒にショッピングに行くとか言つてたから、来るのは桜しか思い当たらない。渚がそう思つた瞬間、ドアが蹴り開けられ、桜が渚に手を振り

「ようす、渚。^{なき}一緒に昼飯食おうぜ」

予想的中。いや、予想より騒々しい登場の仕方だ。せめてドアぐらいい手で開ける。なんのための取っ手だよ。お前の知識は原人以下か。そう言つてやりたいのを堪え、短く一言

「何しに来たの？」

「まあまあ、そう冷めた目で見んなつて。私はただ一緒に昼飯食いたいと思ってさ、お前と」

「サツカーネ部の方は良い訳？」

桜は妙にテンションの高い声で「いいのいいの。さつ、一緒に昼飯食つてさつさと帰ろうよ

「私、部活あるんだけど・・・」

無駄だとわかつていながら一応言つてみる。だいたい帰るんなら一人で帰れ。小学生かお前は。

渚の胸中を知りもせず桜はにっこり笑つて
「自由参加なんだろ？サボつちまえ。お前は私と帰るっていう用事があるんがから」

どんな用事だよ。思わず出掛けた言葉を必死に飲み込む。もう何も言つても無駄だ。

何も言わず毎食を食べ始めた渚を見て桜は満足げに頷き

「私も飯食つか。あ、腹減った」

女性にあるまじき言葉遣いをしつつ渚の向かいの席に持たれる。渚の隣に座つてもいいんだが、両方とも荷物が置いてあるのだ。退けるのも図々しい気がする。一人は黙々とご飯をかきこむ。なんとか話しづらい雰囲気だ。

「桜」

渚は小さく、だがはつきりと桜の名を呼ぶ。桜が顔を上げると、渚の左側の荷物が右側に移っている。渚はそっぽ向きつつ

「こっち空いたよ。来たいなら来れば」「嫌なら行かないけど？」

「いいから来い」

どつちなんだよ。心の中でぼやきつつ渚の左側に腰を下ろす。

「ねえ、質問して良い？」

渚が躊躇いがちに聞いてくる。桜は目をパチパチさせながら

「いいよ。何が聞きたいの？」

「あなたは“空の珠”に選ばれし者なんだよね？」

「ああ、そうだよ」

事もなきに答える。隠す気もないし、どうせ渚も知っている事だし。そうだ、知っているのに何で今更再確認する必要が……。

「嫌だと……思ったことは……ない？」「……はっ？」

唐突な質問に首を傾げる。何が言いたいんだ? こいつ(なぎさ)は。

「逃げたいと思ったことはない?」

「……一回だけなり」

そつか、渚は知らないんだ。私の両親がいない理由。まあ話してもいいんだけど、あんまり話したい内容じゃない。

「そつか……私もあるよ。じゃあもう一つだけ」

黙つて続きを待つ。過去を聞かれたらどうしよう。そんな思いが脳裏を過ぎる。だがその心配は杞憂に終わつた。

「一番、怖い事は？」

「怖い事？」

「そう。田の前で起立してほしくないことは、私は親しい人の血が流れること

俯き目を閉じる。私の田の前で起立してほしくないこと……それは……

瞳の奥で紅蓮の炎が揺らめく。その炎に包まれていく父と母と他の人達。それからもう一人、いつも優しく笑ってくれたあの人の笑顔が過ぎる。

もう一度と田の前で大切な人達を、亡くしたくない

「もう一度と……」

微かに声が震えているのが自分でもわかつた。体も震えている。その震えを抑えるかのように自分の体を抱き、声を絞り出す。

「もう一度と……大切な人達を亡くしたくない」

自分に誓つよう呟く。

『それがお前の心か』

聞いたことのない声が耳にふれる。田を見開き左右を見回すが、渚しかいない。

「どうどうかした？」

突然きょろきょろし出した桜を驚いたように見つめる渚。桜は取り繕つようく笑つて

「なんでもない。さて、早く飯食つて帰りう」

「そうだね」

それからは、先ほどの暗い会話を記憶から消そうとするように楽しい会話になつた。

「よつし、帰るか」

昼食を食べ終え、鞄を背負い帰る準備万端。渚の方を見ると「せつちも準備出来たみたいだな」

「まあね。じや、帰ろつか」

時刻は十一時ちょうど。正午を告げるチャイムが鳴り響く中、二人は昇降口で靴を履いていた。

「口差しが強いな。帰るまでに溶けたりどうしよう」

「溶けるわけないじゃん。頭の構造大丈夫?」

「失礼なことをいう奴だ。喩えだよ。た・と・え」

「ふん、とそっぽを向くと、一言

「子供みたい」

「なんだと・・・」

桜は子ども扱いされるのが大っ嫌いなのだ。ギロッと睨みつけるが、渚はまつたく動じずスタスタ歩いていく。

「ちつ」

舌打ちしつつもついて行く。渚は性格的に合わない気がする。なのになぜ親友関係にあるのか疑問だ。まあどうでもいいや。

自転車置き場に着き、鍵を開け自転車に乗る。桜は暇そうに欠伸をして

「帰りに花咲スーパー寄りたいんだけど、いいかい?」

「どうぞ。私は特に用事ないから」

「じゃ、決まりな」

お先にどうぞ。と渚を行かせる。まつこんなことしてもすぐに追い抜かしからうんだけど。

「あのさ、歩いて帰らない?自転車引きながら。たいして時間変わんないし」

「なんで?」

「だつて自転車じや桜速過ぎるんから・・・追いつけないてな訳で、歩いて下校することになりました。つたぐ、めんどくせ。まあいいや。こうこうのも悪くない。最近部活が忙しくてゆづくり

してられなかつたからな。空を眺めつつそんな事を考えていろと、

横から渚が

「私、十六になつたのに紋章でないんだ」

唐突な言葉にどう反応して良いかわからず、黙つて聞き手に回る。

渚も何か言つてほしいわけじゃないだろ。多分。

「珠も目覚めないし・・・私、ホントに正統継承者なのかな。護つ

てもらう価値、あんのかな」

「お前が正統継承者じゃないなら、他の誰が正統継承者になれるつてんだ。お前は正統継承者に選ばれたんだ。その事は誰にも変えられない事実。だからそこから逃げずに立つてろ。そしたらお前を認めてくれる奴がいるから」

昔一度だけ私も渚と同じことを言つたことがある。そしたら龍兄がそう言つてくれた。あのときの事を思い出しながら渚に言つ。

渚は少し考え込み、小さな声で

「逃げずに立つてろ・・・か」

思う事があるのかそう呟き、晴れ晴れとした顔で微笑み

「出来るかわかんないけどやってみる」

「・・・・・私はお前のこと認めてるけどな」

ついぽろっと声を漏らしてしまつた。渚は喜色満面で抱きついてくる。

「離れ」

じやれ合ひながら信号を渡る。あとは住宅街を通るだけだ。

好きな歌手について渚があつく語つていたとき、桜は何かを通り抜けたような感覚を覚えた。抵抗も何もなかつたので思わず素通りしてしまつたが、奇妙な違和感がある。

(?なんだ)

足を止め左右を見回すが特に変わつた事はない。気のせいかな?

「桜? どうかしたの。きょろきょろして」

「なんか違和感ない?」

「はっ？・・・ん、言われてみればなんとなく・・・」

二人はうんと唸り、考えていてもわからないので家路を急ぐ。よくわかんないけど急いで帰ったほうがいいかも。

先ほどよりやや早足になつた二人を、感嘆したような顔をしているフードを被つた男が電柱の上に立ちつつ見ていた。
まさかこの微妙な差に気づくとはな。さすが珠に選ばれただけのことはある。それなのになぜ珠は目覚めない。男の目的はその理由を確かめることだった。

「さて、どうしようかな」

のんびりした口調で歌うように呟く。やはり十六になつている真海渚を狙うのが妥当か。

「き~めた」

男の姿はその場から搔き消えた。

同時刻。

「十分間休憩！』

キヤブテンの指示により、各自は日陰に行つたり飲み物を飲んだりタオルで汗を拭いたり。そんな中、龍護は重いため息をついていた。理由は

「陽菜の龍～飲み物とタオル　はい、ど~ぞ」

「・・・なんでお前が持つてんだよ。てか毎回こいつことしなくていいから。ウザイ」

「きや~龍が照れてる」

「照れてねえし。物凄い曲解だな」

陽菜から飲み物とタオルを奪い、翔太と恭哉に

「休憩中だけどつか行かね？精神が持たない」

「いい案だ。桜んどこ行こうよ」

「そうと決まつたら」

三人は砂埃を上げつつ走つていく。マラソン大会一位、一位の実力

はだてじやない。

あつといつ間に屋上に着きドアを開ける。が

「誰もいねえ」

桜の姿はおろか渚の姿さえない。部室の鍵は閉まつてこる。てことほ

「帰つたのか」

「ヤバくねえか？ 桜達の力は目覚めてないんだぞ」

「つ追うぞ」

龍護の声を合図に三人は桜達の後を追う。

間に合つてくれ

龍護達が必死に走つてゐるのを露知らず、桜と渚は数学の文句を言つていた。

「あの外国語の綴り見たいのを覚えろとか無謀すぎんだよ」

「そうそう。あんなの教わつたつて使い道ないつての」

「だよね～。よくわかつてんじやん、桜」

「なんか妙に息が合うね。怖いわ」

「どういう意味？」

「怒んなつて」

渚の頭をわしゃわしゃかき回す。渚は迷惑そつに眉を寄せる。その時ひゅん

何かが風を切る音が聞こえた。桜は音のしたほうに視線を向けると何あれ・・・ヤバつ・・・・

桜の視界に移つたのは、正確に自分達日掛けで飛んでくるブーメランの様な物だつた。ただし、太陽の光を弾く刃つきの。

反射的に渚を右に押し、一緒に避ける。だが、一瞬遅かつた。

びりつ

服が破れる音が鼓膜にぶつかる。左肩の袖が破られた。

「つ・・・」

服が破れた箇所から血が滲んでいる。浅く斬られたみたいだ。傷口を押さえると手のひらに血がつく。痛つて。

「いきなりなにすん・・・桜・・・血が・・・」

左肩の袖が白から鮮やかな赤へと染まっていく。桜はポツケからハンカチを出し、きつく縛る。ナイフで指を切ったこと計五十回以上、車に撥ねられたこと計二回、自転車同士でぶつかった事計十回以上、骨を折ったこともある。こんなのもつて事ない。

自分に言い聞かせ、ブーメランが飛んでいった方向を見る。そこには逆光により誰かはわからないが人間が立っていた。（まあ、逆光がなくてもフードを被ってるから顔は見えないけど）人の家の屋根の上に堂々と。

渚も桜の視線を追い目を細める。

「誰？」
「知るか」

短く返し、ブーメランを投げてきた人を観察する。まったく挨拶なしに襲つてくるなんてなんて危ない奴だ。

第四章　目覚め

「今のをかわすなんて・・・やるじゅん。“空の珠”に選ばれし者、

天空 桜」

「何でそれを・・・」

そのことは私を含めた九人しか知らない事だ。もしかして・・・

「お前が“珠狩”つてやつか」

「ご明察。知つてたのは意外だ」

軽やかな笑い声をたてる。声から推測するに・・・多分男かな？自信ないけど。渚は男から視線を外さず

「どうする？」

「何をだよ」

「逃げるかつて聞いてんの」

「逃げられるわけないだろ！逃げようとした瞬間、あのブーメランを投げられてはいお終い。だよ」

「じゃあどうすんだよ」

ぎやあぎやあ言い合つていると、男は面白そうに笑い声を上げて
「仲間割れかい？まあ二人とも逃げられても困るから、天空 桜は逃げてもいいよ。俺の狙いは真海 渚だからさ」

「渚が狙い！？・・そうか、渚は十六を迎えているから

「その通り。ということで真海 渚。覚悟しな」

渚は首から下げる“海の珠”を握り締める。これだけは渡さない。絶対に。

桜は立ち尽くしたまま動かない。逃げてもいいんだ。逃げてもいいんだ・・・けど。

「へえ、どういうつもりかな」

「桜は渚の前に立ちはだかる。

「渚だつて大切な親友なんだ。見捨てて逃げるとか論外」

そうだ。もう一度と失わないよう大切な人達は自分が護るんだ。

「桜・・・」

渚が嬉しそうに笑っている。この状況で笑えるとか・・・どんな神経してんだか。まつ気持ちはわからんでもないけど。

「友情の深さには驚きますけどね。実力が伴わないと・・・男は一瞬で一人の目の前に出現した。一人は目を見開く。まったく見えなかつた。

「ただの絵空事だよ」

渚に刃つきブームランが振り下ろされる。避けきれない。

桜は渚の名を呼ぶ。だが、声が出ない。

声を出しても届かないなら、届かせるだけの力がほしい渚に駆け寄る。だが、遅い。

走つても間に合わないなら、間に合つだけの疾さがほしい必死に手を伸ばす。だが、空を切るだけ。

手を伸ばしても護れないなら、護るための刃がほしいほんの少しでいい。今、大切な人を護れるだけの力を。
『それがお前の心か』

桜の紅い刀の形をしたネックレスから真紅の光が迸る。それに呼応するように“空の珠”が白い光を放つ。

“空の珠”が目覚めた

男は一人から離れる。まだ十六になつていないので目覚めるとは・・・

・末恐ろしい奴だ。

桜を覆つていた真紅の光が弾ける。そこに立つっていたのは確かに桜だ。ただし、左腕に紅い翼の紋章があり、真紅の腰帯に二振りの太刀を差していることを除けば。

「それがお前の心の形か」

「そうだ。私の心の形は大切な人達を護るための刃がほしい鞘から刀を引き抜く。

「綺麗・・・」

渚が思わずそういうのも無理ない。真紅の空に桜吹雪をそのまま閉じ込めたような美しい太刀は、桜の名前とよく合ひ。更に言うと、鞘まで紅桜色だ。もう一本は紅玉を溶かしたような紅い太刀だ。

「よし、行くか」

「来なよ」

桜は男の前に出現した。速い。男は驚いたようにひゅうと口笛を吹き「もうそこまで力を使いこなせるとはね。恐ろしい血筋だ。天空家」「うつせ」

金属同士がぶつかり合う音が響く。桜は今日初めて持ったとは思えないほどに太刀を扱い慣れている。実際に手馴れた扱いだ。桜も驚いていた。手のひらに吸い付いてくるような不思議な感じだ。今日初めて触った感じがない。

渚は忙しく視線をさ迷わせる。一人のスピードについていけないので。

五分間斬り合っていた二人の戦いに終わりが見えた。

「どうかしたのかい？ずいぶん息が上がっているけど。そりやそつか。体が負担に耐え切れてないんだもんね」

「くつ・・・」

男は余裕そうなのに桜は荒く速い呼吸を繰り返していた。汗も尋常じゃないほどかいている。まだ斬りあつて五分しか経っていないのにだ。

「桜！」

渚の心配そうな声が響く。だが、返事が出来るほど余裕がない。剣先が小刻みに震えてる。視界が霞む。

「そっ、霞むんじゃねえよ。

「どうやら立てるだけで精一杯みたいだね。まあ無理もない話だ。珠が目覚め、腕に紋章が出た後は激痛で立つてられないらしいからね。それなのに太刀まで出しちゃって・・・動けるのが不思議だよ」男はニヤツと不敵な笑みを浮かべる。桜は悔しげに顔を歪ませる。息が上がるばかりで体が上手く動かない。足が霞むほどの蹴りが視

界の隅に見えた。とつさに横へ飛んで避ける。が、腹に食らい桜は吹つ飛ばされた。ブーメラン男は太刀を支えに立とつとしている桜に近づいていく。

「桜から離れる！…ブーメラン男」

そんな声と共に桜の横を何かが飛んでいく。視線をずらすと、教科書のようなものだった。表紙の文字は・・・数学？。教科書はブーメラン男に見事命中。しかも顔面に。ナイスコントロール。思わずそう思つてしまつた桜。すぐに我に返り

「お前、教科書は投げちゃダメだろ。いくら数学が苦手だからって突つ込むとこそこじやないだろ？が。なめてんのか。お前り」「この世に数学なんてなくていい。よつて教科書も必要ない」

「同感」

「勝手に話しつけてんな」

男は怒鳴りながら渚に向かつてブーメランを投げる。桜は限界に近い体を無理矢理動かしブーメランを跳ね返す。

「桜・・・そんな体で動いちゃ・・・・・・」

苦しそうに息をしている桜の肩に触る。そこから伝わる異常な熱に、渚は声を荒げる。

「桜ツ・・・」

「ほつとけ。今は逃げることだけを・・・考えろ」

「だけど」

「いいからツ・・・」

「桜は怒鳴ろうとしてげほげほ咳き込む。

「そんな体で動くな！アホ」

「誰がアホだ！足手まとい」

「なつ・・・なんだと・・・今にも倒れそうな奴に言われたかないよ！！」

「俺の存在を・・・忘れんな！」

男はブーメランを手で持ち突進してくる。体はまったく動かない。さつきの移動で体に限界が来たみたいだ。

ビキッ

何かにひびが入る音が三人の鼓膜を打つ。男は今までの余裕そうな表情から一変して、緊張した面持ちでひびの入った空間に目を向ける。

ビキビキ

ひびは次第に広がっていき、ついに完全に砕けた。季節はずれの雪のようにひらひらと舞い落ちていくガラスの破片のようなもの。桜はすっと感じていた奇妙な感覚が消えたことに気づいた。

「ちつ、やはりこの程度の結界じゃダメだつたか」

男が舌打ちをし、近くの家の屋上に飛び乗る。

「お前の方向音痴は相当なものだな、翔」

「うつせーよ。お前が信号無視して車に轢かれかけたから遅くなつたんだろうが」

「まあまあ、お二人とも。着いたからいいじゃないつスか」

緊張感のないやり取りと共に現れたのは、龍護、翔太、恭哉の三人だ。

「三人とも・・・なんでここに」

渚が驚きを込めた声で訊ねる。三人は渚と太刀を構えている桜を見て

「桜、お前珠が目覚めたのか」

「紋章が出てる・・・てことは体中に激痛が駆け巡つてるはずだぞ。何で立つてられる。お前いろいろと常識無視しそぎだろ」

恭哉の言うとおり。熱した焼きじてを体のいたるとこに押し付けられている感覚が桜を襲つていた。意識が飛んでもおかしくないくらいの激痛だ。

桜は三人の登場に安堵したのか、ぐらりと前に倒れこむ。手から力が抜け、太刀が地に落ちる。渚が手を伸ばすが、間に合わない。

ドサツ

「セーフ」

龍護が地面にぶつかる前に抱きとめて、そのまま抱き上げる。軽々

と。ブーメラン男は頭を搔き

「参ったな～。あんたら三人が来るとは想定外。いつたん退く他ないね」

そう言い、一瞬で姿が搔き消えた。翔太と恭哉は深追いはせず、二人の自転車を起こす。

「家に帰るか。まず桜を寝かせないと

「それが一番いいっスね～」

桜をソファーに寝かせ、適当にタオルをかける。三十分まであと五分だ。それまでは氣絶することはおろか痛みが麻痺することもない。天空＆夕空家の犬二匹も心配そうに桜の頬を舐めている。ちなみに名前はミニチュア・ダックスフンドの方がリト、ショットランド・シープドッグの方がみかんだ。

「こればかりは俺らも手出しあ出来ないからな」

龍護は悔しそうに拳を握り締める。左肩には包帯が巻かれている。蹴りを食らつたお腹には湿布を貼つといった。明日になつたら癌になるだろ？

「もうすぐ千夏達が帰つてくる。そしたら家に集まつてもうむづく。メールはしといた」

翔太が黒い携帯をパチンと閉じる。恭哉は桜の方をちらちら見ながら

「あと何分？」

「三分」

渚が時計をじーっと見つめて答える。その眼差しが真剣で怖い。桜は苦しそうに胸元を押さえている。

「三十分」

渚の声と共に全員の視線が桜に集まる。桜は目をぱちぱちせざる恐る体を起こす。さっきまでは痛みで指一本も動かせなかつたのに、今は痛みの欠片もない。

「どこも痛くない？ 気分は？」

「平気。どこも痛くないし気分も悪くない。ちょっとだるいぐらい

かな」

ほつと安堵の息をつく四人と一匹。桜は左腕を見て顔を顰める。こんな広範囲に刺青みたいなものが入った左腕を学校でさらしたら…・特別指導になること間違いなしだ。ついてね~。

「包帯でも巻いてくか」

でも待てよ。どうしたの? な~んて聞かれたらなんて答えればいいんだ!? 怪我した。。。とかが妥当か? あ~も~私はめんじくさいこと嫌いなのに~。

「桜、自覚がないだろ! うから言つてあげる。今のセリフ、全部声に出して言つてたよ」

渚が桜の肩をぽんつと叩きつつ言つて、桜はしまつたつと言わんばかりの顔で口を塞ぐ。今頃遅いと思うんだが…。

「そうだ。や~くら、お前の武器見せてよ」

翔太が瞳をキラキラさせながら桜に頼む。子供みたいだ。桜は困つたように微笑み、ネックレスに触り

「それが・・・どうやって出せばいいかわからなくて・・・・・・・・

「名前呼べばいいんだよ。例えば疾風^{はやて}、疾風^{しつぶつ}」

すると、翔太の両手首にあるタ空色のブレスレットがタ空色の光を放つ。それと同時に左右の手のひらにタ空色の光が集まつていく。光が弾けたとき両手のひらにあつたのは、拳銃だつた。両足には銃を入れるホルダーのようなものがついている。制服を着ているのに妙にしつくりくるのは何故だろう。

「俺の武器は一丁拳銃なんだ。カツコ~いだろ」

「カツコ~い」

ちょっと触らせて、と拳銃を受け取る。本物の拳銃なんて実際に見るのも触るのも初めてだ。渚が小さく「馬鹿馬鹿しい」と鼻で笑う。「ほら、お前も自分の武器を出して」

「う~ん・・・何だつけ? 名前・・・名前・・・名前」

呪文のように唱えながら記憶を掘り返す。太刀の名前なんか聞いたつけ? 聞いた覚えないんだけどなあ。ただでさえ記憶力ないのに。

「呆れた・・・」

恭哉が頭を押さえる。渚は興味津々な顔して

「天空と龍護さんの武器は?」

「そうだ。二人の武器み~せて」

桜もネックレスを弄りつつ一人に近づく。龍護はちょっと嫌そうな顔をして、恭哉に「お前先に出せよ」と肘で突く。恭哉はあからさまに俺が?という顔をしつつも小さく「緋龍」と呟く。

紅いネックレスから同色の光が迸り、その光が腰に集めしていく。光が弾けたとき腰帯に紅い太刀が一振り差してあつた。その姿が制服と合うから不思議だ。

「俺の武器は太刀なんだ。名前は緋紗。結構気に入ってるんだ」

「俺の武器は拳銃。黒焰だ」

いつの間に出了のか左手に拳銃を持っている龍護。足にはホルダ一がついている。桜は二人を交互に見ながらネックレスを弄り続けている。どうしても名前が思い出せない。

(困ったな~なんて名前だっけ?)

うんうん悩んでいると唐突に心に浮かんできた名前があつた。

「紅桜と・・・紅炎・・・」

第五章 “海の珠”の目覚め

桜のネックレスから真紅の光が迸った。その光が消えたとき、桜の腰には真紅の腰帯。その腰帯には太刀が一振り差してある。それと同時に桜の足元に桜色の瞳をもつた狼と全身が炎のように燃えている瞳が真紅の鳥が現れた。

「出た！・・・なんで狼と・・・・と・・・・り？」

早速太刀を抜きつつ狼と鳥をじろじろ眺める。桜色の刀身がきらりと光る。

「それがお前の武器か・・・って何で刀一本？一刀流なわけ？しかも全身燃えてる紅い瞳の鳥と桜色の瞳をもつた狼って・・・不思議な組み合わせだね」

翔太がじろじろ見ながら訊ねてくる。そう言われてもわかんないんだけど・・・それに鳥と狼の方はこっちが聞きたいぐらいだし。「へえ、紅い方も抜いてみてよ。見てみたい」

渚が桜舞に見入りながら言う。狼など視界に入つてない見たい。桜は右手で紅桜を持ったまま左手で紅炎を抜く。

「こっちも負けず劣らず綺麗」

渚が感嘆のため息を漏らす。桜は紅炎をまじまじと見つめる。燃え上がる炎をそのまま閉じ込めたかのような真紅の刀。この紅は昔、自分の大切な人達を奪つた。それと同時に自分の一番好きな色だ。

「ネックレスに戻すのはどうやるの？」

唐突に思い至つたのか、渚が龍護に問いかける。龍護は何を言い出すんだと言いたげな顔で

「そんなんの自分の意思でやるに決まつてんじやん」

そう言つが否や、龍護は銃をホルダーにしまう。すると銃は黒い光を放ちながら消えていった。桜は数秒ほど黙り込み、紅桜と紅炎を鞘にしまつ。

「刀が・・・」

桜の刀は紅い光を放ちつつ消えた。いつの間にか恭哉と翔太の武器も消えている。だが、なぜか狼は消えず床に寝そべっている。隣にはリトとみかんもいる。

「なんか疲れた。てかお前は誰さ」

桜はソファーに腰掛けつつ狼に問いかける。するとまず鳥が口を開け『あなたが我が主ですか。私の名は紅炎、不死鳥フエニックスです。以後よろしくお願いします』

丁寧な口調で挨拶する紅炎。桜はどうぞよろしく、と返す。次に狼が『お前が我が主か。・・・ずいぶん強気な主だな。おまけに短氣で無鉄砲で喧嘩つ早い性格か・・・子供だな』

ふん、と鼻で笑われた桜はにっこりと満面の笑みを浮かべ

「今なんと言いましたですか？」

「桜・・・日本語おかしいよ」

渚が冷静に突っ込むが聞いちゃいねえ。

「いや・・・そこじやなくて不死鳥と狼が喋ったことに突っ込めよ。渚は

恭哉が頭を搔きつつそう言つが、狼の馬鹿にしたような声音で無視スルされた。

『言葉もまともに話せないのか。幼稚だな』

『言ひすぎですよ』

紅炎が諭す声とブチッ、と何かが切れた音が聞こえたのが同時だつた。

「おや、なんの音かな」

恭哉が苦笑いを浮かべつつ呟く。まあだいたいの想像はつく。桜の元から短い堪忍袋の尾が切れたのだろう。桜は狼に向かつて殴りかかるうと暴れる。龍護が必死に押さえなければ本当に殴りかかっていただろう。狼は（多分）嘲笑し、毛づくろいを始める。紅炎は首を傾げどうしようか思案している様子だ。

「○#%£」

この世の言葉とは思えない言葉を滅茶苦茶速いスピードで口から吐

き出す桜。女性としてあるまじき言葉遣いだ。狼はもはや桜など眼中にない様子でくつろいでいる。それが余計力ンに触る。

「はいはい、落ち着いて。日本語喋ろつか」

龍護は桜を押さえながらそう言つ。恭哉と翔太は爆笑を抑えようと口を塞いでいるが、笑い声が漏れている。

『お前、“珠守”か』

『そうだ。俺と恭哉と翔太は“珠守”だ』

狼の問いに答える龍護。桜は暴れ疲れて大人しくなっている。狼はゆっくりと体を起こし、お座りの格好をとる。その横に紅炎が座る。床が燃えないか心配だ。

『俺は“空の珠”に選ばれし者の心の具現化。わかりやすく言つと、桜の心が動物になつたと思えばいいわけだ。武器は桜の心の形、俺らは“心力”と呼んでる。

で、俺は桜の中で目覚めた真の力が動物になつたつてわけ。これを俺らは“操力”と呼んでいる。性格も本人（桜）そつくりだぞ』

『私は桜様と同じ性格ではないんですけど、一応桜様の力の具現化です』

『わかつてるよ』

龍護が人当たりのよい笑顔でそう言つと、狼は感心したように唸る。
「ちなみに俺らも目覚めたぞ。俺のは九尾、翔先輩のは隼、龍先輩のは・・・犬だっけ？」

『うるさい、千夏だつて目覚めてる。一角獸だつたかな』

『悠紀と一夜も目覚めているぞ。確か・・・・燕と虎だつたかな』

三人の脳内に一夜に負けず劣らず気弱な深緑の瞳をもつた虎の姿が過ぎつた。主人に似すぎてる気がしないでもない。

『才能があるな。お前ら』

『さすが珠を護るものとして選ばれた方々ですね』

狼が自分の主人を横目に見つつ一人でぶつぶつ言い出す。そんな狼を紅炎が翼で叩く。桜はまだ不機嫌そうにしながらモリトとみかん

を弄る。

渚は四人を見ながら自分の力の無さを痛感していた。運動神経も無い上に武器も真の力とやらも無い。あるのは足を引っ張るといいういられない才能だけ……。

(そんなの嫌だ)

ぶんぶん首を振り“海の珠”と空色の携帯についた蒼い三叉槍の形をしたキー・ホルダーを握り締める。視界の隅に赤いものが見えた。視線を動かすと、桜の左腕の包帯に滲んだ血の赤だった。

大切な人達に血を流してほしくない

『それがお前の心か』

渚の青い三叉槍の形をしたキー・ホルダーから蒼い光が迸る。それに呼応するように“海の珠”が白い光を放つ。

「“海の珠”が目覚めたつ！？」

「何も今じゃなくとも」

渚を覆っていた蒼い光が弾ける。左腕に蒼い波の紋章があり、右手に海のように碧い三叉槍を持っている。足元には上から落ちてきたかのように頭で倒立している川瀬が……。何があつたんだろう。川瀬は床に足をつけ、頭を押さえながら一言

『・・・痛い』

ああ、やつぱり喋るんだ。桜がなんとも言いがたい顔をする。非常識にもほどがある。

それにしても何で私の時は狼と紅炎は出てこなかつたんだ？まつどうでもいいや。

川瀬から目線を外し、渚の武器に注目する。

「きれい。海を具現化したみたい。やつぱ渚は青だよね。似合つてゐる。川瀬も綺麗な蒼い瞳だね」

渚の背中を、しばし力任せに叩く。手形がつきそうだ。渚は三叉槍を桜に向け

「切れ味がどんなんかわかんないんだよね・・・実験台一号になつてくれるかな？」

「『めんごめん』」

軽い口調で謝り、恭哉の後ろに隠れる。追おつとした渚は突然襲つてきた体中を駆け巡る激痛に顔を歪ませる。こんな体で桜は戦つていたのか。ありえない。よろめいた渚を無造作に、そりやもう荷物のように抱き上げ、翔太はニヤッと笑い

「これで一人。あとは美優だけだな」

「ああ、まあ美優達はもうすぐ帰つてくるだろっ」

ガチャ

「ただいま」「お邪魔します』

「噂をすれば・・・だな」

龍護にウインクしてみせる翔太。龍護は眉根を寄せ、一言

「人数分のお茶持つてくる。桜、夕飯の用意しろ！ 適当でいいから

「わかった」

慌ただしく台所へ駆けていく桜。次いで、龍護は翔太が荷物のよう

に担いでいる渚を指差し

「お前はそいつをソファーに寝かせてやれ

「りょ～かい」

間延びした返事をして言われたとおりにソファーに寝かせる。その横に川瀬が我が物顔で寝そべる。千夏が心配そうにリビングに入つてきて

「『空の珠』が目覚めたんだって？ 桜は大丈夫なの？」

「千～夏～。私ならピンピンしてるから心配無用」

「そうそう。桜は殺しても死ななそудだからな」

恭哉が皿をテーブルに並べながら口を挟む。桜は野菜を切つていた包丁を恭哉に向く

「そこ動くなよ。その減らす口、一度と利けないようにしてやる」

桜の物騒な言動にリビングに入つてきた一夜は真っ青になる。次いでやつてきた悠紀が「やつちまえ～・・・なんで狼と川瀬と燃えてる鳥？ つて渚！ 大丈夫か」渚のそばにえらい勢いですっ飛んでいく。

美優はテーブルに座り、龍護から飲み物を受け取つて紅炎と狼と一緒にくつろいでいる。

「桜ちゃん、やめな。夕飯楽しみにしてる」

千夏がそう言つと、桜は再び野菜を切り始める。

「美味しいチャーハン作るから待つてね」

「ふう、助かった」

「いつそのまま死んでしまえばよかつたのに・・・」

「何か言いましたか？悠紀君」

「いえいえ。この年で幻聴が聞こえるのはちょっとやばいんじやないですか？恭哉君」

「そんな事ないですよ。俺は確かに聞こえたんですから」

空中で飛び散る火花が見えそうだ。一人はにっこり満面の笑顔を浮かべつつ嫌味を言い合つ。一夜は龍護から飲み物を受け取り、会話が聞こえないように美優と雑談を始めた。

千夏は渚の様子を伺いながら翔太に話を聞いている。

しばらくして、桜がチャーハンと生野菜を皿に盛り、

「よし、出来た。皆、飯だぞ。食え。その狼と川瀬と紅炎も食うなら食え」

『いただきま～す』

無心で食べ始める（渚を除いた）一同。

「桜が作った料理にしては美味しいな。あれから勉強したのか」

あれから、というのは桜達が中学1年のときの事だ。あの時の桜の料理は非常に個性的な味だった。率直にいうと不味かった。だが今は千夏と龍護、翔太、美優のおかげで料理の腕が上達した。

「まあね」

生野菜を自分の皿に盛りつつ嬉しそうに笑う。龍護は桜の頭をぐりぐり撫で回し

「よかつたな。褒められたぞ」

「ちよつ・・・やめてよ、龍兄」

子供のように頬を膨らませ、龍護の手を振り払う。子供扱いされる

のは嫌いなのだ。そのまま無言で食べ進めていく桜を横田に見ながら龍護はニヤニヤ笑つている。

「いじりそつさま」

一番に食べ終わったのは桜だった。千夏と翔太と龍護と恭哉以外の全員が皿を見開いた。早つ。

「速いな、食べ終わるの」

「ん~、まあね」

「コッ」と笑いながら皿を片付ける。

「そうだ。皆に聞きたいんだけど、明日空いてる?」

千夏が突然そう言い出し、一回は顔を見合わせる。

「私は空いてるよ~」

桜が皿を洗いながら言つと、続けて龍護と翔太、恭哉が「俺らも空いてる」と答える。

「俺らも空いてるよ。なあ、一夜

「うん。バスケは日曜日だから」

「私も部活自由参加だから空いてるよ」

美優がお茶を飲みつつそう言い、千夏は嬉しそうに笑い

「じゃあプール行かない?」

『行く行く』

全員声を揃えてわいわいはしゃぐ。桜は渚の顔をべしべし叩き

「おい、聞いたか? 明日プールに行くんだつてよ。楽しみだな」

渚は目を何度も瞬かせて焦点を合わせる。そして薄い笑みを浮かべて頷く。川瀬は迷惑そうに目を眇める。桜はなおもべしべし叩きながら

「元気ねえな。顔色も悪いし・・・大丈夫か?」

「お前だつてさつきはそつだつたんだよ」

恭哉が桜の頭に拳骨を落とす。桜は恭哉の腹にパンチを決め、怒鳴る。

「何しやがんだ! 痛いじやないか。暴力反対」

「やかましい。自分と同じ境遇の奴の顔をべしべし叩きやがつて・・・

・まつたく

「つるさい。誰を叩いてが殴りつが叩きのめそつが私の勝手でしょ」

「なんだそりや」

言い合いを始めた二人を周りは呆れた表情で見つめる。毎度毎度よく厭きないな、と思いながら。

第六章 操力と心力

「さて、この馬鹿共はほつといて風呂でも入れるか。千夏、頼むわ」龍護がのんびりくつろぎつつ千夏に頼む。千夏は「自分でやりなよ」と文句を言いつつも風呂場へ。

『そろそろ三十分経ったころか。おい、大丈夫か？ひ弱な主だな』「うるさいな、ひ弱で悪かつたね。名前は？」
『蒼波あおばだ』

「渚・・・起きて大丈夫か？」

翔太と龍護が視線を向けると、激痛が治まつたのか渚が体を起こしていった。その顔には戸惑いの色が露になっていた。あれだけの激痛が嘘みたいに消えた。余韻すらない。残つたのはだるさぐらいか。

「心配してくれてありがとう、悠紀。もう大丈夫」

悠紀に微笑みかけると、悠紀はニコッと柔らかい笑顔を浮かべる。
「今日俺らん家泊まるやついるか？」

「私は家に帰る。悠紀は？」

「俺も帰ろつかな」

「じゃあ一緒に帰ろ」

「いいよ」

「ぼつ僕も・・・」

「私も家に帰るかな〜」

「俺、泊まります」

恭哉が元気よく手をあげる。天空家とタ空家の兄妹はまたかよ、と言わんばかりの表情で恭哉を見る。恭哉はニコッと邪氣のない笑顔を浮かべて

「いいじゃん。俺ん家遠いんだよ」

「一昨日も泊まつただろ」

桜があきれた様に呟く。恭哉は桜の肩を叩き「いいじゃんか～つれね～な」「つれなくて結構。気安くさわんな」

「はい、喧嘩しない」

いつの間にか戻ってきていた千夏が二人の間に立つ。桜と恭哉は睨みあいながらも大人しくなる。

「渚ちゃん、明日藤咲さんも来るって。天海海滨公園行こうって言い出したの藤咲さんなんだけね」

「琉璃が・・」

渚は嬉しそうに満面の笑顔だ。反対に渚を除いた一同はいつせいに顔を引き攣らせる。特に男性陣は心なしか顔色が悪い気が・・・。「明日で人生が終わるかも・・・遺書書いとこ」

恭哉が鞄から筆記用具を取り出し文を書き始めた。悠紀は「顔、洗つてきます」と力なく言い置いてよろめきつつ洗面所へ。一夜はその付き添い。龍護は「俺、明日バスしよっかな」等と翔太に囁いている。翔太は翔太で「じゃあ俺は明日仮病を使って家に引き籠もる」等と言っている。

『琉璃とやらは男には嫌われているのか?』

「そうじやないよ。皆苦手なだけ」

小声で聞いてくる狼に同じく小声で返す桜。

何故男性陣がこんなにも嫌がるのかは明日のお楽しみみて事で。

「あ～あ。やっぱこうなるか」

千夏は困ったように腰に手を当てる。桜は深呼吸を繰り返し、ようやくいつも通りの顔に戻して

「当たり前だよ。私も琉璃のあの自分大好き性格は理解できない。あと美学研究部っていうものはや部として機能しなさそうな部活を作っちゃう無茶苦茶なところ」

まつ、嫌いじゃないんだけどね」と付け加える。ちなみに今の言葉に嘘はない。ただ生まれ持った性格が合わないのだ。美優はお茶を一口飲んで

「私もちよつと苦手かな・・・渚さんには悪いけど」

「確かに琉璃は自己愛が半端ないけど、友達の事に親身になつてくれるし純粋で意思が強いし・・・なにより可愛いし」

確かに可愛い。それは認めてやつてもいいかもしない。しかし友達の事に親身になつてくれるつて？弄られたことしかないんスけど。

あと琉璃のどこが純粋だよ。意思が強いのはわかるが。

心の中で猛反対する桜。だが口には出さない。口に出した瞬間、確実に殺られる。

「藤咲さんの事を熱く語つている渚さんは輝いてるねえ」

どうでもよさげな口調でのん気にくつろいでいる美優。渚の熱弁などまったく聞いてない。いや、右から左へ流れていってるのかも。

「順番に風呂に入れ。帰る奴は帰れ」

「龍護さん冷て~」

恭哉がソファーに寝そべり、おやつを頬張りつつ声を上げる。龍護は無言で恭哉に近づき

ゴン 「帰れ

「痛つてえ~」

頭を両手で押されて床にしゃがみ込む恭哉。あれは結構痛そうだ。

「じゃお邪魔しました」

顔にざまあ~とでかでかと書いてある悠紀が鞄を持ち玄関に向かう。次いで渚、一夜、美優と続く。

「明日十時にここ（天空＆夕空家）に集合だからね。遅れた人は荷物持ち」

桜が大声でそう言つと、即座に抗議の声が返ってきた。その声に「聞こえない聞こえない」と呪文のように言い放つ。

「じゃあ明日ね」

四人は各自の家へ帰つていった。

「俺先に入るから」

翔太がう~んと伸びをして風呂場に向かつ。

「どうだつた？ 真海 渚と天空 桜は」

ここは廃ビルの五階。今では人が気味悪がつて近づかなくなつた場所だ。その場所に蠅燭の明かりが揺れる。

「天空 桜の持つ“空の珠”が目覚めました」

「“空の珠”が？“海の珠”ではなく？」

驚きの含まれた声が先ほどの声とは別の方からする。

「ええ、まだ目覚めるはずがない“空の珠”が目覚めました」

一番最初の声の主の横にいる男が続きを促す。その男の横には翼の生えた馬が立っている。夜闇に溶け込む漆黒の毛並みだ。報告をしている男は更に続ける。

「武器は太刀が一振り。それも珠が目覚めたばかりなのにこちらの攻撃についてきました。剣技も力が目覚めたばかりとは思えぬほど腕前。油断禁物です」

『私も同意見だ』

男の肩に乗っている鼬が声を発する。

「そうか。偵察ご苦労」

暗い声はそう労い、己の漆を塗ったような闇色のネックレスに触る。大きな鎌のような形をしているネックレスだ。

「我ら“珠狩”が本格的に動き出す時が来たようだ。会うときを楽しみにしてるよ、天空 桜」

翌日。

「本日晴天。いいプール日和だね。楽しみ〜」

『朝からつるさいな、お前』

「うつせ。だいたい何でお前はネックレスに戻らないんだよ。つか名前は？あれ？紅炎は？」

桜が当たり前のような顔で一緒にベッドで寝た狼を見下ろす。狼はうーと伸びをして

『言つただろ。俺はお前の操力。お前の武器とは違つてお前本来の力なんだ。名前は紅桜だ。』

それから紅炎はまだ寝ている。朝は苦手らしい

『だからつてネックレスに戻つてればいいじゃん。必要なときに出てくれば。刀と同じ名前なんだ』

『それじゃ間に合わないときもある。それに、姿が見えてればわざわざ呼び出す必要もないしな。そうだ、その方が覚えやすいだろう。

単細胞のお前には』

「だいたい、ソウリヨクつて何なんだよ。わけわかんね。しかも何で狼。というか誰が単細胞だ。口悪狼』

『教えてやろう。何故狼なのかだがお前の力の形が狼だからだ。それから武器はそれぞれの心の形。そして操力は人間の生来からもつている力なんだ。俺は口悪じやない』

訳がわからないといった顔をしている桜に狼は呆れたように嘆息し、話を続ける。

『つまり、俺らはお前ら人間が生まれたときからもつてている何かを操る力なんだ。誰もが何かしらを操れる力を持つている。お前の場合は炎と再生だな。言つておくが、他の誰かと被る場合もあるからな。使い方は違うが。

大半の人間はこの力に気づかず生涯を終える。稀に自分の中の力に気づく奴もいるが、扱い方がわからず、または呼び出し方がわからず一生を終える』

桜は目を瞬かせる。よくわからないが呼び出せないものが大半ということだけはわかった。それと自分は再生の力を持っているという事も。・・・・再生？つて

「つちよつと待つた！」

話を続けようとした狼を遮る。桜は自分の手のひらを見つめて

「私、二つも力持つてんの？」

『ああ。何だ、気づいていなかつたのか』

意外そうに目を瞬く狼。桜はちょっと顔を背け

「気づいてませんでした」

『お前は何かを甦らせる事が出来る力を持っているんだ。だが、この力にはリスクが伴う。甦らせるものによつてな。例えば人の命なら誰かの命と引き換えにななくてはならない。単純に物を甦らせるのなら簡単だがな。人に関わるものも甦らせようとすると、それ相

応の代償が伴う。記憶なら記憶、命なら命、心なら心という風に。だが、これだけは覚えておけ。この力はお前の体力・精神力共々ほとんど使い切る。再生の力を使った後は、戦闘は不可能だ。わかつたな』

「再生……」

『ごくりとつばを飲み込む。自分にそんなどんでもない力があるなんて……信じらんない。

『話を戻しても良いかな。とにかくこの力に気づき、扱える者の条件は？自分の心の形を知ること。

お前の場合は大切な人達を護る為の刃がほしいっていう感じかな。十六歳になつてないのに珠が目覚めたのは異例だったが、あの状況で目覚めるのは納得がいく。あの時珠が目覚めなければ操力も目覚めなかつた』

「なんで？」

『操力と珠は持ち主の感情が高まつたときや、命の危機が迫つたとき最も目覚めやすいんだ。それにあの時目覚めてなかつたら渚は今頃あの世逝きだ』

確かにそうなつてたかもしれない。あいつ普通の人間が目で追える限界速度をやすやすと飛び越えやがつたし。

「龍兄達は何で私より早く目覚めたの？」

『それはあいつ等がお前より早く条件を満たしたからだよ』

ふーんと納得したようなしてないような顔で考え込む桜。『これは何か、龍兄達の方が先に自分の心の形を知つたって事か。それはそれでなんとなく嫌だな。負けた感じがする。』

『話を戻すぞ』

狼が桜の視線を自分に向けさせてから話を続ける。

『条件？は心に深い傷、もしくは喪失感、穴等がある者。これは推測だが、心の傷、または穴を埋めようとして操力が目覚めるんじやないかと俺らは考えている。過去に大切な者を亡くしたつてのが一番わかりやすい例かな』

桜はびくっと体を強張らせる。脳裏に赤い炎が見えた気がした。それともう一つ、いつも自分の手を引き、守ってくれていたあの人の優しい笑顔。

ぎゅっと瞳を閉じる。狼は気遣わしげな瞳をして小さく続ける。

『その二つの条件を満たしたものは眞の力が目覚める』

第七章 自称美少女登場

しばらくして気分が落ち着いてから大きく伸びをして、ベットから起き上がり、着替える。今日は（ていうかいつもだけど）動きやすい格好で固める。上は黒いノースリーブ。下はジーパンの半ズボン。そして仕上げとばかりに上に灰色の半そでの上着を羽織完成。カーテンを開け、窓を全開にする。心地好い風が頬を撫でていく。桜は窓枠に登り、小さな声で

「美～優～ちゃん。起きてる？」

ガラツ

窓が開く音と共にベージュ色のワンピースを着た美優が顔を出した。桜は美優の窓枠へ手を伸ばし、美優の部屋へ侵入。余談だが、菊地家は天空＆夕空家の隣にあるのだ。そして桜の部屋と美優の部屋が偶然隣で、しかもちょっと足を伸ばせば余裕で行き来出来るようになっているのだ。

「おはよう、朝から元気だね。桜ちゃん」

「おはよ、美優ちゃん。眠そうだね。また夜更かししたの？」

「しないよ。十二時半にはベッドに入つたから」

ならいいけど。軽い運動をしていると、桜の部屋のドアが叩かれる音が聞こえた。

「ヤツバ。朝食食べないと。また後でね、美優ちゃん」

慌ただしく自分の部屋へ戻り、ドアを開けると不機嫌そうな龍護の姿が・・・（とついでに毛が黒く、目も黒いジャーマン・シェパード・ドッグが・・・全身真っ黒だ、カッコいい）。嫌な予感。

「りゅうに「桜・・・俺、今日行かなきやダメか？」「はつ？」

怒られると思つてたのにいきなりなに言い出すんだ？こいつは。桜が思わず問い返すと、龍護は俯いて

「昨日、藤咲に会つと思つただけで一睡も出来なかつた」

そりや可哀想に。まあ仕方ないか。龍兄は琉璃に会うたびに求愛 +

地獄のケバケバ地獄×琉璃特製男メロメロ香水（自作）を味わつて
るんだから。犬が哀れむように鳴ぐ。あれ？ 嘶くないんだ。

「龍兄頑張つてよ。今日は龍兄の大好きな肉じやが作つてあげるか

ら

「・・・・・努力する」

『お前肉じやが好きなんだ。初めて知つた』

「つづせ。俺が何好きだろうと黒くろには関係ないだろ」注・本命は黒炎えんじや

ああ、やっぱり喋るんじやないか。

蛇行しながら階段を下りていく龍護。桜は龍護を落ちないように支える。下に下りたらあと一い名もこんな風になつてんのかな、と半ば厭ぎれながら。

黒は大きく口を開けて欠伸をしている。可愛いけど手伝えよ。お前の主人だろうが。

下につき、リビングへのドアを開けると

『おつ？ 千夏、桜が來たぞ。龍護も一緒だ』

千夏の顔に甘えるように頬を摺り寄せている白い目を持つた一角獣がそう報告した。お前も喋るのか。てか何で一角獣？

「俺は持病のプールに行つてはいけない病が・・・」

「そんな病気はないよ、お兄ちゃん。ほら、さつさと朝食食べちゃつて。片付かないでしょ。疾風と疾風も喧嘩してないで」

「俺は持病の家から出ではいけない病が」

「そんな病気もありません。それにここの恭哉君の家じゃないから。馬鹿言つてないでさつさと食べて。こり、紺紗。恭哉君のご飯食べない」

『え〜』

予想的中。・・・いや、予想より悪いかも。男二人は生氣の抜けた顔をしつつ朝食を突いている。あと隼が一羽と九尾がいる。ん？ 九尾？

「まつたく・・・おはよ、桜」

「おはよう・・・で、どうしたのさ。そこの生氣の欠片もない男二

名は。それと何で一角獣と隼と九尾?それに一角獣と九尾って伝説上の生き物じゃ・・・不死鳥もだけどさ」

「一角獣は私の真の力のだよ。名前は雪^{せつ}。雪のように白くて綺麗でしょ?男の方は・・・想像に任せん」

「わかった」

スカートに半そでといった軽装の千夏は深いため息をつく。大方の事情はわかってる。一人も龍兄と同じように琉璃に会うと思つただけ眼れなかつた、だろうな。絶対。

「龍兄、朝^{あさ}はん食べようよ」

ゆさゆさ揺すると、龍護はよろよろと歩き・・・テーブルに着く前に崩れ落ちた。

「こりやダメだ」

額を押さえる桜。

琉璃に会つ日は必ずこいつなるのだ。世話のかかる兄貴だよ、まつたく。

「桜、朝食食べなよ。片付かない

「そだね」

その後、龍護達の口に朝食を押し込み、十時になつたので外へ出る。当然のよくな顔で紅桜が足元へ、紅炎が肩へ舞い降りた。

「そうだ。紅炎って呼びにくいから紅つて呼んでいい?」

『お任せします。桜様の好きなように呼んでください』

家の前にはもうすでに美優以外の全員が揃つていた。

「あれ? 美優ちゃんは?」

「さつき三毛と遊んでたよ? そのうち戻つてくるつて」

薄い青の半袖に七分丈のジーパン、肩には川瀬といった格好の渚が興味なさげに答える。三毛とは菊地家の三毛猫の事だ。ちなみに、

菊地家は柴犬も飼っている。名前は柴。名前でわかるように柴犬だ。

「遅くなつてごめんね、三毛と遊んでたら時間忘れちゃつて」

三毛を抱かかえ、息を弾ませながら美優が走ってきた。黒いデニム

のズボンに英語が入っている白い半袖、上着が薄赤のチェック、足元には九尾といった格好の恭哉が小さく

「何してんだよ、つたくうおあ」

語尾は彼の本意ではない。では何故かといふと、壁にめり込んでいる誰かの拳と関係ありそうだ。

『自業自得だな』

「あらら。桜が怒っちゃった」

軽い口調で言いながら安全圏へと避難する九尾と渚。他の人も心得たものでゆっくり、だが確實に桜と恭哉から離れていく。

「お前ら、俺を見捨てんな~」

「ごめん、なに言つてるかさつぱりわかんないや」

悠紀が意地悪げな笑みを浮かべて耳を塞ぐ。

「悠紀、それと紺紗。お前ら覚えてろよ」

『記憶力ないんだ。覚えらんない』

「同じく覚えらんない。むしろ覚えない」

桜はいつそ清々しいほどに綺麗な笑みを浮かべ、恭哉の胸倉を掴み

「天国逝けや」

「おつ落ち着け桜・・・話し合えばわかつぎや~」

澄み切つた快晴の空に絶叫が響き渡つた。

電車に乗ること一時間。琉璃との集合場所、天海駅に着いた。ここから天海海滨公園まで約一時間つてどこか。

電車に動物連れでどうやって乗つたかって?私も最初疑問に思つたよ。そんで紅桜と紅に聞いたら

『俺らは眞の力が目覚めた奴か、お前が心を許した奴にしか見えないんだよ』

『それが私達が姿を見せようとしない限り見えません。ご安心ください、桜様』

『その桜様つてやめて?敬語とか上下関係とか大っ嫌いだから。桜つて呼んでよ。パートナーでしょ』

紅炎の頭をぽんぽん撫でると、紅炎は身を縮めて

『そんな恐れ多い……でも主の桜さ……さつ……桜が言つなり』

「よろしく」

てな訳です。

「おつはよ～皆」

大勢の男を従えつつ黄色地に黒で英語が書かれているノースリーブ、ショッキングピンクのショートパンツ。栗色の髪にはピンクのリボンの飾りがついたシユシユ、耳には紫色の小刀の形をしたピアス、瞳は紫色の女の子がこちらに向かつて走ってきた。

「おはよう、琉璃」

「・・・・・おはよう・・・・・? (渚以外の全員)」

朝からテンション高い声の主は多分藤咲 琉璃。格好が派手すぎて琉璃とわかるのに時間がかかった。渚の親友にして私の友でもある。そして琉璃は・・・

「おはよ、琉璃の龍と翔と恭と悠紀といつち～」

大の男好きだ。それからいつち～といふのは一夜の事だ。可哀想な事に変なあだ名で呼ばれている。男子一同と動物達は顔を琉璃から背けつつ挨拶する。心なしか表情が引き攣つてる気が・・・。

「琉璃とデートする為に来てくれたんだよね。嬉し～」

龍護に飛びつく琉璃。龍護はげつと奇妙な声を出し決死の表情で横へ逃れる。黒炎も必死に逃げる。琉璃はぷーっと頬を膨らませて

「もう、龍つたら照れちゃって。いくら琉璃が可愛いからって照れなくてもいいんだよ」

「照れてねえ。そうやつて曲解すんのやめる」

龍護は冷や汗を拭いながら文句を言ひ。他の男子はいつでも逃げられるように身構えている。

「とにかく、早くプール行こうよ。暑いし疲れた」

渚が琉璃と楽しげに話しながら歩を進める。他の人達は五歩後をついて行く。その後をぞろぞろと琉璃の虜になつた男共がついてくる。

正直ウザイし暑苦しこ」といの上ない。はつきり言って誰だよ、お前ら。心の中で毒づく。言つてもいいんだが喧嘩になつたらちよつと困る。部活面で。

イライラしながら地面に転がつてゐる石を蹴り飛ばす。その石が『偶然』琉璃に当たつた。

「ゴメンゴメン。ワザトジャナイカラ（棒）

『棒読みだな』

紅桜が笑い声を上げる。恭哉も恭哉の足元にいる紺紗も嘲笑つてゐる
「桜・・・酷い」

わざとらしく目じりに涙を溜める琉璃。いかにも演技っぽい。てか

更にイライラが増してきた気がする。

『おいーそこの女』

「あ?」

第八章 プールだ！

半ば喧嘩腰で声のした後方を見ると、琉璃の虜になっている男共がいた。もしかしながら先ほどの声はこいつらだらうか。殴りてえ。
「俺らの琉璃様になにしやがんだ！」この野蛮女

びく

桜の肩が微かに反応する。顔にはぞつとするほど冷たい笑みが張り付いている。琉璃の虜になつた者以外のお馴染みの一団は、心得たものでゆっくり後ずさり、紅は美優の肩へ避難。渚と美優は両手を含ませている。

「琉璃の為に頑張つて～」

琉璃が投げキッスをしながら声援を送る。男共は全員目をハートにして『はい。頑張ります』

「あほらじ」

桜は小さく吐き捨てて、鞄を恭哉に投げて指を鳴らす。部活の事などすっかり頭から抜け落ちている。元来喧嘩つ早い性格だし、喧嘩については忍耐も我慢も生まれつきない。売られた喧嘩は残らず買う。

「十秒で終わらせてやるよ。あの世で天使と戯れてな

「ひい」

情けない悲鳴が上がった。安全圏に避難した龍護達の方から。

「一夜・・・いい加減慣れなよ。こんなのいつものことじゃん」「翔太が呆れ混じりにそう言つと、恭哉が「無理無理。こいつ気弱すぎだから」『そうだね』「酷いよ・・・恭哉君と緋紗

一夜ががくりと肩を落とす。一夜の足元にいる深緑の瞳の虎が身を摺り寄せ、美優が慰めるように抹茶のお菓子を差し出し

「聞き流しな、一夜君。恭哉君（あんな奴）の言つことをいちいち間に受けてたら身がもたないよ」

「そつそつ。気にすんな」

悠紀も一夜の頭をぽんぽん撫でつつやつ言つ。一夜は小さく頷いて

「ありがと、二人とも」

「ふう、すつきりした。眠気覚ましにはなったかな」

桜が清々しい笑顔を浮かべつつ戻ってきた。彼女の後方には痣だけの男が山になっていた。悲惨な光景だ。琉璃はその男の山に向かつて「琉璃、弱い男は嫌いなんだ。ゴメンね」などと抜かしている。酷いな。

「桜の眠気覚ましにさせられちゃって・・・可哀想に」

渚がまつたく同情してない口調で言つてゐる横で、美優が墓標を立てていた。恭哉がなになにと文章を読む。

「この者達は喧嘩を売る相手と仕える相手を間違え天に召された。

ふうん、なかなかいい文章じゃん」

「恭哉君に褒められても全然嬉しくない

「相変わらず俺に対しての態度冷たくね？俺泣いちゃう～

「勝手に泣いてろ。アホ」

桜がすれ違いざまにボソッと呟く。それを田ぞとく聞きつけた恭哉は額に青筋を浮かべつつ

「何か言いましたか？桜さん。もう一度言つてくれ下さい」

「何も言つてしませんよ。空耳じゃないんですか？恭哉君」

最初は普段どおりの口調で話していた二人だが、会話がだんだん刺々しくなつていく。

「もつかい言つてみろつつてんだよ！何度も言わせんな！..」

「うるさいな、耳元で喚かないで。鼓膜が破れる」

「あの二人つて意外と仲いいよね」

唐突に渚が切り出した。千夏が考え込むように首を傾けて

「確かに・・・喧嘩ばっかしてるくせにね」

「言えてる」

翔太も大きく頷く。美優と一夜は会話に入らず、抹茶のお菓子について語り合っている。悠紀は恭哉と桜を見ながら何かを考え込んでいる。

「あの一人付き合つちゃえればいいのに」

琉璃が会話に割り込んできた。つい先ほどまで龍護に「データしよ」「琉璃の彼氏になつて」など言いまくっていたのに。ちなみに言い寄られていた龍護は魂が抜けたかのようにボーッとしている。黒が龍護の足を鼻で突いたりズボンを引っ張つたりしているが、反応なし。

「突然会話に割り込んで第一声がそれかよ」

翔太がやれやれと肩をすくめる。それから悠紀と渚は付き合つてします。わからないだろうけど・・・。中三の時恭哉と桜の策略により二人同時に告白したそうな。

大まかに話すと、桜が渚に恭哉が悠紀に「告白まであと〇〇日」「告白まであと〇日」「告白まであと二十四時間」「告白まであと一時間三十分」と三十分単位でメールを送り、「夜の零時に一人告白すると両想いになれる」といかにもビックにありそつたフレーズ通りになつたという訳だ。

「翔の意地悪」

「意地悪で結構。それから翔つて呼ぶな。せめて翔太と呼べ。で?何での二人が付き合うとかそんなすつ飛んだ話になる訳?・言つとくけど桜は物凄い鈍感だからね。自分の気持ちにも相手の気持ちにも気づかないよ」

「恭は桜の事好きなんだよ。絶対」

なに言い出すんだ、こいつは。と言わんばかりの視線が琉璃に殺到する。琉璃は「ホントだもん」と言い張る。

「わかつたわかつた。そこまで言つなら理由を言つてよ」

千夏がわくわくした表情で訊ねる。琉璃は自慢げに胸を張つて

「女の勘」

「・・・・・・・・・・・・・・」

あるものは遠い目をし、あるものは「聞いた私が馬鹿だつた」と愚痴る。あるものは頭を押さえ、あるものは抹茶のお菓子を頬張つている。

「・・・プールが見えてきたな」

たっぷり五分置いてからようやく口を開いた翔太。翔太の言うとおり田の前には大きなウォータースライダーが見えてきた。

「じゃあプールサイドで会おう。場所取りはしどくから」

男性陣と別れ、桜達は女性更衣室へ。三連休初日といつにともあり結構混んでいた。

「桜はどんな水着なの？」

「はつ？」

上着を脱ごうとしていた手を止め、琉璃をまじまじと見返す。そんな事を聞いてどうするのだ？ 今から着るのに・・・。

「いいから教えてよ～」

「上が黒地に紅い紅葉、下がこげ茶のズボンだけど・・・」

「ビキニじゃないの？」

「そんなもの誰が着るか」

あんな露出度が高いもの死んでも着たくない。それに琉璃みたいにスタイルがいい人が着るならまだしも、自分のような不細工な奴が着たら皆の目が腐っちゃう。

せつせと着替えながらそんな事を考えていると、琉璃が

「桜、琉璃には及ばないけどスタイルいいんだからビキニにしなよ。どうせその水着ビキニの上にズボン穿いたりするんでしょ？」

「そうだけど、スタイルよくないから。最近一キロ太ったし」

「それなら私はどうなるの？」

渚が暗い顔で会話に入ってきた。

「渚瘦せてんじゃん。もつと食つた方がいいよ。骨と皮になつちやうよ」

「それは言てる」

千夏が上は白地に薄い桃の花、下が黒いスカートといった格好で桜に同意する。

「私的には千夏ちゃんと桜がもつと食べたほうがいいと思いますよ」

「これ以上食つたら太つちゃうつて

「私も」

「桜ちゃんと千夏ちゃんが太つてるんなら私はメタボだね」
美優が深緑のワンピース水着に茶色いズボンといった格好で桜の後ろから会話に入ってきた。

「何でや。 美優ちゃんはメタボじゃないよ」
着替え終わり、と荷物を背負いながら呟く。

「眞見て、琉璃超可愛くな~い？」

上が青地に白い雪のワンピースで下が黒いズボンといった格好の渚が琉璃の方を見て一言

「琉璃、似合つてるよ」

白地に紫色の蝶が舞つているビキニを着て腰に手を当てている琉璃。 桜は何も見なかつたかのように視線を流し

「さて、行くか」

「そうだね」

「うん」

三人は琉璃の格好について一言も感想を述べず、歩いていく。後ろから「三人とも・・・酷い」とか言つている声が聞こえた気がするが振り返らない。

「遅ーよ、お前ら

男性陣が場所取りしている所に着いた途端、文句を言われた。恭哉に。

「悪かつたね」

荷物をそこらに放り投げて椅子に座る。恭哉が首を傾け

「泳がないのか？」

「あの馬鹿をどうにかして」

桜の指差す先には早速男をオトしまくつている琉璃の姿が・・・。

男性陣は一分間沈黙し

「ほつとこう」

龍護のこの一言に渚以外の全員は即座に従つた。

「最初の荷物番誰にする？」

翔太がちらちらとプールに視線を飛ばしながら皆に問いかける。悠紀が

「じゃんけんでいいんじゃないですか？男女一人一組を作つて」

「そうするか。桜は俺とな」

龍護が一コツと微笑み、桜は若干嫌そうにしながらも頷く。一夜と美優、悠紀と渚、翔太と千夏とペアーチが決まった・・・が。

「俺余りかよ」

恭哉がズーンと落ち込んでいる。渚は人の悪い笑みを浮かべて恭哉の肩を叩き

「琉璃がいるじゃ」「却下」

渚の言葉の途中で全力で拒否する恭哉。首がちぎれそうな勢いで首を振っている。そんなに嫌か。

「じゃあ龍兄とペアーになれば？三人でもいいでしょ？龍兄」「まついいけど」

桜がそう提案すると、恭哉が闇にさした一筋の光を見るよつた顔で

「ありがとう、桜。今度なんか奢る」

「ティラミス食べたい

「わかった。奢る」

第九章 意外な敵

てな訳で、最初は一夜と美優ペアーが荷物番。そこから一時間交代で回していくらしい。ちなみに桜達は三番目。

「よし、まずは波のプール行こうよ」

「行こう行こう」

子供のようにはしゃぎつつ早歩きで歩いていく恭哉と桜。その後を追いながら悠紀と渚は楽しげに話している。いいねえ、ラブラブで。「いつあいつ等が襲つてくるかわからないのにこんなことしていいのか？龍

「逆だ。こんなときだからこそだよ。

それに、渚の話だと桜は“珠狩”的スピードにもついていけてたみたいだし、渚もそんぐらいならできんだる。いざ戦いが起きても誰かが力を使つたら俺ら全員に伝わるはず。俺らが“操力”または“心力”を使つたら、同種の力を持つたもの全員に余波が届くからな。問題ないだろ」「

「それもそうか」

その後、流れるプールに行つたりウォータースライダーに行つたり二十五メートルプールに行つたり滑り台に行つたりと忙しく動き回つた。おかげで昼になり荷物置き場に戻つた頃には渚と美優と千夏が

「も・・・一歩も・・・・・動けな・・ガク」

「死ぬな！渚」

という展開に・・・。疲労死するなんていつたい何があつたんでしようね。男性陣+桜はぴんぴんしてゐるのに。

「昼飯買つてくるわ。焼きそばでいいしょ？」

恭哉が財布をぽんぽん投げつつ一同に聞くと「好きにして」「・・羽の生えた赤ちゃんだ」「いいんじやん」「・・・お花畠が見え
る」「いいと思つ。一人じゃ大変だうし僕も一緒に行くよ」「

「いつてらー」「綺麗な川が見える」「渚！しつかりしろ」「結局返事したの四人だけじゃん。聞いて損した。しかも三名天に旅立つてるし」

「演技でもないこと言うな！」

悠紀が顔を真っ青にしながら怒鳴る。恭哉は「悪い悪い。じゃ行ってくる。一夜、行くぞ」「まつ、待つてよ。恭哉君」

「転けんなよ」

桜がそう言つた傍から一夜がよろめいている。心配だな。

「俺、トイレ行つてくる」

「俺は渚と美優と千夏の飲み物買つてくる」

悠紀と翔太が立ち上がり、悠紀は更衣室へ、翔太は自動販売機を探しに行つた。龍護も

「俺もタオル濡らしてくるから。動くなよ」

「わかってるよ。行つてらっしゃい」

龍護に手を振る。暇なので下にタオルを敷いて寝転がり、空を見上げる。今日は雲が多いが、今は太陽は顔を出している。

「眩しいな・・・

手を翳し、そのまま空を眺める。青空は好きだ。特に、吸い込まれそうなほど澄んだ青空は。

でも夕焼けの空の方がもつと好きだ。少し切なくて、すぐに消えてしまいそうなほど儂く、優しい色。まるで人のよう。

「つてなに思つてんだか・・・。もういないのに」

はあとため息をつき手の甲を目に当てる。優しい笑顔でいつも自分の一步先を歩いていくあの人、むじょに会いたくなつた。本来ならあの人、が正統継承者だったのに・・・。あの時・・・。

無意識に珠を握り締める。あの時、私を追つて・・・・・・珠越しに空を見る。澄み渡つた綺麗な空を見ていると、何故か泣きたくなつてきた。その時

「俺らと一緒に来てくれない？」

「はい？」

感傷に浸っていると、低い声が聞こえた。手の甲を退け体を起こすとそこには絵に書いたようなキャラ男が一人・・・。金髪が太陽の光を弾いて眩しい。

「だから、俺らと一緒に来てくれない?」

「そう言われて素直にはいつて言う人がいると思いますか?もう少し頭使つたらどうです」

桜はうぜえという顔をしつつ手を左右に振る。あつち行けのサインだ。男共は機械的に同じ言葉を繰り返す。

「俺らと一緒に来てくれない?」

「しつこい」

殴りかからぬよう自制する。イライラすんな。だいたい、見ず知らずの輩に声かけられるほど有名人じやないし。

「俺らと一緒に来てくれない?」

「・・・?」

おかしい。桜は妙な違和感を覚え、男一人を見る。さつきは気づかなかつたが目が空ろだ。体の動きもどこか不自然だ。まるで操られているかのように・・・。

「^{ベニ}紅、紅」

小さな声で一人を呼ぶ。そしてそのまま小声で続ける。

「こいつら、もしかしなくても操られてる?」

『完璧にな』

『“珠狩”の仕業ですね』

舌打ちをし、立ち上がる。男二人は変わらず同じ言葉を繰り返している。これじゃあ壊れたロボットだ。

「しつこいって言つてるだらうが!」

一方の男の腹に拳を、もう一方の男の腹には蹴りを入れる。容赦なく。ちよつと酷すぎる気が・・・。

『いくらなんでもそこまでしなくても・・・』

紅桜は同情を込めてそう言つたが、桜は冷たく一言

『何度も同じ言葉を繰り返されたら誰だつてイラつくでしょ。つた

く、壊れた機械じゃあるまいし

『この人達は操られていたのですから不可抗力では……』

「知るか」

酷すぎる。紅桜と紅は顔を見合させ、がくりと肩を落とす。桜は男共の体を操っていた正体を見つけるために、男共をじろじろ眺めたり触つたり抓つたり殴つたり……。

「これか……」

桜の手のひらにあつたのは、薄いピンク色の紐のようなものだつた。紅桜と紅も桜の手のひらを覗き込み

『この紐は“心力”だな。お前の太刀と一緒にだ』

「じゃあ誰かの心の具現化……」

手のひらの上で紐はまるで生きてるかのように動いている。桜は紐を握り締め

「これを逃つてけばいるんだな。“珠取”が

桜は自覚はないだろうが不敵な笑みを浮かべていた。その顔はどこか嬉しそうだ。紅がそう指摘すると、桜はニヤッと笑い

「もしもブーメラン男がいたら叩きのめしてやる。私の親友の命を狙つた罪を思い知らせてやるんだ。楽しみだな」

『怖いな』

紅桜がボソッと呟く。桜は意氣揚々と歩き出す。普通自分の命を狙つている奴の元に自分から行く馬鹿はいるか? いるか……俺の目の前に。

紅桜は半ば呆れ混じりに桜の後を追う。紅は桜の肩で抗議している。これは罷です。龍護さん達に知らせるべきです。待ち伏せされてたらどうするんですか、等と。だが当の本人はまったく聞いてない。

『俺はこんな自分勝手な奴に従わないといけないのか』

不幸だ、と今更嘆いても遅い。ため息をついた時、桜があつと声を上げ

『美優ちゃん達置いてきちゃった。ヤバイ……紅桜、頼む』

俺かよ、と言いつこうになつたがその言葉をため息に変え、諦め混じ

りに

『わかつた』

「ありがとう、紅桜。助かる」

これで心置きなくあのブーメラン男をぶちのめせる、と楽しげに続ける桜。紅が

『そのブーメラン男がいるとは限らないんじゃ・・・』

と言つてゐるが、完璧にスルーしている。頭の中はブーメラン男をぶちのめす事で一杯なのだらう。

『桜らしいな』

そうだ。こんな奴だからこそ俺は・・・

『無茶すんなよ』

紅桜が気遣わしげにそう言つと、桜は紅桜の頭をわしわしかき回し微笑む。

「心配してくれてありがとう、美優ちゃん達を頼む」

『任せとけ』

紅桜と別れてから五分後、人気のない場所にたどり着いた。ちょうど売店の裏に当たる所で、人は滅多に来ない場所だ。桜は紐をくいき引つ張りつつ

「ここでいい筈なんだが・・・誰もいないな」

辺りに人影は一切ない。困ったように頭をぽりぽり搔き、どうしたものかと腕を組む。

『誰もいないみたいだし戻りましょう。龍護さん達が心配しますよ』
「それもそうだな。つて言つてもあの馬鹿兄貴が私の心配なんかするわけないとしつけど』

そう言いつつも踵を返す。刹那、異質な空気が辺りに満ちる。この感じは前にも・・・

『ということは』

小さく咳き、太刀を呼び出す。紅はいつでも動けるよう身構えてい
る。静寂が支配する中、足音が響いた。それと同時に女の声がどこ

からか聞こえた。

「やつぱり。来ると思つたよ、桜」

聞き覚えのある声だ。中学からの同級生で、よく競い合つた仲だ。そして中学の時、恭哉と付き合つてたらしい。高校に入つてからはほとんどあつていなかが、この顔を忘れるわけない。独特の甲高い声。

「・・・亜衣莉」

「へえ、覚えてくれたんだ。嬉しいね」

亜衣莉と呼ばれた女の子は薄いピンクの瞳を細める。こげ茶の髪は後ろで束ねてある。中学までは黒かつたのに、こつの間に染めたのやら。しかも肩にはピンク色の蜘蛛を乗つけている。

「髪型えたのか。久しぶりに見たら髪も染めてるし」

「この色のほうが綺麗でしょ？ずっと髪染めたかったから」

「似合つてんじやん。どうでもいいけど」

桜は相手の言動すべてに注意しながら構えを崩さない。今気を抜いたらヤバイ。そんな感じがする。

「そつちは相変わらずだね。ちつとも変わつてないじやん」

友好的な雰囲気でゆっくり歩み寄つてくる亜衣莉。桜も少し弓き彎つた笑顔を作り

「悪かつたね。でも髪は伸びたよ。もつ少しで腰に届く」

胸を張つて言つと、笑われた。眉を吊つ上げ睨みつけると、亜衣莉は肩を振るわせて

「こつこめ・・・」

「笑いながら謝つても許さん」

桜の緊張が僅かに緩んだ。それと同時に頭上からブーメランが飛んできた。

『桜！』

紅の警告の声と、桜が体を反らすのはほぼ同じだった。頬に浅い切り傷が出来る。桜は頬の血を拭いつつ

「あつぶね〜、もう少しで当たつてたかも」

ブーメランは持ち主の元へ戻つていく。桜がブーメランに視線を奪われていると、死角から亜衣莉の紐が迫る。

『桜！左』

「…………」

桜の眼前まで迫つた紐は、紅が放つた炎で燃え散つた。桜はほおと息を吐き出す。

「紅、ありがとな」

『いえいえ』

前を見ると、信じられない人物が立つていた。桜は我が目を疑つた。

「やつ、桜ちゃん」

「や・・・山・・下・・・大地・・・先・・・輩」

そこにいたのは山下 大地だつた。手にはブーメランを持っている。肩には朱色の瞳を持つた白い鼬が乗つてゐる。目の前の現状に頭がついていけずに突つ立つてゐる桜に、大地はニコッと微笑みかけ

「驚いた？ そう、杉浦と俺は“珠狩”的一味”

朱色の瞳が鋭く光る。朱色の光と共にブーメランが消えていき、茶髪の髪を鬱陶しそうにかきあげ、淡々と続ける。

「桜ちゃんの、敵だよ」

ぎゅっと拳を握り締める。先輩の言葉に嘘はない。先日襲われたときも、さつきの攻撃も的確に急所を狙つっていた。

嘘じゃ、ないんだ。亜衣莉も先輩も、本当に・・・「敵なんだ」絞り出した声は掠れていた。大地は人当たりのよい笑顔を顔面にはりつけてゐる。亜衣莉はいつも見慣れている無邪気な表情だ。だが、二人は自分の命を狙つてゐるのだ。迷うな。

きつく目を閉じる。体が微かに震えているのがわかる。
くそ、震えてんじゃねえよ。

「桜、私達はあなたを殺しに来たわけじゃない。“空の珠”を渡して。そうすれば逃がしてあげる」

「却下。これは絶対に渡さない」

ポツケに入れといた“空の珠”を守るように刀を構える。紅も戦闘

態勢に入った。亜衣莉は残念そうに眉を顰め
「あ～あ、殺さないとダメか」

明確な殺気が桜の全身を突き刺す。ぐつと息をつめ、相手の出方を伺う。状況はこっちのほうが圧倒的に不利。どうする。

「俺が桜ちゃんを殺る。お前はあの鳥を殺れ」

「私に命令すんな。変態男。行くよ、綾

『わーい』

亜衣莉は自分の髪ゴムに触り、冷たく笑う。大地は携帯についている朱色のキー ホルダーを掴む。

ピンクと朱色の光が消えたとき、亜衣莉は紐を大地はブーメランを持つていた。

桜はゆっくり息を吸う。一瞬でも気を抜けば、死ぬ。

「行くよ。構えな、桜ちゃん」

第十章 声

語尾を置き去りにしながら迫つてくる大地。桜は迷いがそのまま現れ、反応が遅れる。

キーン

金属同士がぶつかる音が響く。桜は一、三歩後ろに下がる。反動でよろめいたのだ。大地はブーメランを振りまわし、勢いをつけて投げる。桜はそれを転がつて避ける。が、腕に鋭い痛みが走る。視線を向けると、血が流れている。避けたのに、何故。

「俺のブーメランは風を纏うことで切れ味が上がり、攻撃範囲も広がる。ただ避けるだけじゃ俺の武器からは逃げられない」

「くつ・・・

悔しげに声を漏らし、立ち上がる。武器に力を纏わせることが出来るのか。なら私にも出来るのか？ でもどうやって。

『心ヲ研ギ澄マセ』

「えつ？」

戦闘中にも関わらず左右を見回す。だが近くに誰もいない。紅の声でもない。じやあ何処から・・・。

『刀ニ炎ヲ灯ス事ヲイメージシロ』

「刀に炎を灯す」

深呼吸をしてイメージしてみる。刀に炎を灯す・・・刀に炎を灯す・・・

ゴオオ

目を開けると刀が燃えていた。桜は顔を輝かせる。

「出来た」

『当然ダ。お前ニハソノ力ガあるノダカラ』

「力・・・」

「何をぶつぶつ言つているのか知らないけど、戦闘中に考え事とは余裕だね」

驚いた顔をしつつもブーメランを投げてくる大地。桜はブーメランを真っ向から受け止め、弾き返した。ブーメランに火が移り、大地に向かつて返つていく。それを慌てて避ける大地の顔には驚愕の表情が張り付いていた。

「バ・・・バカな」

驚愕に目を見開く大地。桜の大地の目の前に出現し、腹に蹴りを入れる。大地は優に五メートルは吹っ飛んだ。桜は不敵に笑い

「この前私を蹴り飛ばした仕返しだ」

「ちつ」

素早く起き上がり、ブーメランを呼び戻す。

金属同士がぶつかり合う音が何度も響く。桜も大地も口元に笑みを刻んでいた。実に楽しそうだ。

「素人のくせによくやる」

「素人じやないしつ」

斜め上から肩口を狙う。大地は手首を返し、それを受けた。桜はすかさず軌道を変え、横腹を狙う。大地は軽く目を見開いたものの、その攻撃を受けたかのように見えた。だが、中途半端な体勢で斬撃を受けたせいで、ほんの僅かに大地の体勢が崩れた。桜はその隙を逃さず、大地の足を払う。

「なつ」

今だつ。

たまらず傾いだ大地の腹部に、桜色の太刀が襲う。大地は目を見開き、無理矢理体を捻る。

ドサッと何かが倒れる音と共に、血飛沫が上がる。大地は地面に倒れ、腹部を押さえている。桜はしてやつたりと言わんばかりの顔で立つている。

「やるじゃん。俺に傷を負わせた奴なんて久しぶりだ」

「そいつらが弱すぎたんじゃない、デスか。ムカつくんでそんな雑魚と一緒にしないでいただけます? これでも護身術の類は片つ端から叩き込まれてるんだよ。

最後に一言、なめんじゃねえ

亜衣莉は視線は紅に向けたまま

「苦戦してるの？代わってあげようか？」

「つるせえ、こいつの飲み込みの速さに驚いただけだ」

大地はブーメランを勢いよく投げる。ひゅんと風を切る音が耳に届く。桜は真っ向から受け止め、相手に弾き返す。が

「いな・・・い」

大地が視界から消えていた。すると下から

「がら空きだよ」

咄嗟に太刀を盾にするが、間に合わない。視界を白いものがおおい、左腕に鋭い痛みが走る。鮮血が迸り、桜は壁に向かって吹っ飛ばされた。地に刀を刺し、勢いを殺して壁に激突はなんとか避けた。足から力が抜け、片膝をつく。左腕には大きな口のような傷口が出来ていた。反射的に左腕で体を庇つたのだ。

左右の腕からは血が溢れ、大地を赤く染めていく。反射的に左腕の傷口を押さえる。そんなことをしても無駄だとわかっているが。

「 」

痛みに顔を歪ませながらも立ち上がる。その間も血が流れていき、右手も赤く染まっていく。渚が見たら卒倒するかもな、と関係ないことが脳裏に浮かんだ。

「 よくやつた、飛来^{ひらい}」

肩に乗つている鼬の頭を撫でる。鼬の爪は桜の血で真っ赤だつた。

『 桜！その出血量はまずいです。早く止血を・・・っ！』

「 よそ見しちゃダメだよ。あんたの相手は私なんだから

紅が叫んでいるのが聞こえる。視界が霞がかってきた。頭の芯がボーッとする。多分血が足りてないのだろう。血の気は多いほうなのだ。

他人事のように左腕を眺める。真っ赤な血は相変わらず流れ続けて

いる。

『 深くやり過ぎたかな・・・』

「加減しろつて言つたのに・・・。リーダーに怒られちゃうじゃん。

馬鹿飛来」

『知るか。だがこいつの判断はよかつたな。でなきや今頃内臓とか

飛び出してたかもね』

『グロイ表現すんな。想像しちまうだろうが』

大地は本当に想像してしまつたらしく、口に手をやりそっぽ向く。

「勝手に・・・・・つ話し進め・・・な」

『“空の珠”ヲ握レ』

「え・・・」

言うとおりに珠を握る。するとどこからか声が指示をする。

『目クラマシニナリソウナ天氣ヲ言エ』

「目くらまし？いきなり言われても・・・」

『イイカラ言エ!..』

「かつかみ・・・なり?」

適当に呟いた瞬間、あつという間に結界内に黒雲が出現し、白銀に輝く雷が落ちてきた。あまりの眩しさに思わず目を瞑る。

雷光が収まつてから目を開けると、大地と亜衣莉は目を押さえている。どうやらもろに食らつたらしい。視界が白く染まっていることだろう。

チャンスだ。

桜は残りの体力と氣力をかき集め、炎を召喚する。それを刀に纏わせ、思いつきり振り切る。炎の斬撃が大地と亜衣莉目掛けて放たれた。炎刃は横に広がり、大地達に迫る。炎刃の通つた跡は地面が深く抉られ、黒く焼け焦げている。

『ダメです！その力はあなたの体力と精神力を使うんですよ。珠の力を使つた後にそんな無茶したら・・・・』

『まだそんなが残つてたんだ。さすが“空の珠”に選ばれし者』

二人は迫り来る炎刃を目が見えずとも気配で感じ取つていた。飛来が一人の前に飛び出し、真空の衝撃波を口から放つ。炎刃と衝撃波がぶつかり合い、数秒間拮抗する。だが、体力・精神力共に限界に

たつしていた桜の一撃は、二人には届かず相殺される。

相性云々ではなく、純粹に体力・精神力で劣っていたのだ。

『これで仕舞いだ！』

飛来が再び衝撃波を放つ。桜はぎりっと唇を噛みしめ、太刀を掲む。

パンパン

黒い炎の塊が二つ桜の横を通り過ぎた。その炎は真空の衝撃波を燃やした。テレビでしか聞いた事のない音が鼓膜に伝わる。ぼんやりとした意識の中で、桜がゆっくり視線を巡らすと、見覚えのあり過ぎる人達が。

「こんなところで結界張ってなにしてんのかと思えば、一人で一人を突きまわして楽しinでは・・・趣味悪いな。それとさつきここから轟音しなかつた?しかも、でつかい黒雲あるし」

「桜が珠の力使つたんじやん?“空の珠”を使えばあのくらい造作もないでしょ。

山下、やつぱりお前だつたんだな。“珠狩”的情報収集係は、相手を射抜くような鋭い視線で睨みつける翔太。大地は人当たりのよい微笑を浮かべ

「あれ?意外だな。気づいてなかつたんですか?翔太君。それよりどうやって入ってきたんです?一重結界張つたんですけど

「同調して入つた。似たような力使えんだ。そんぐらい出来るに決まつてゐる。騒ぎは起こしたくないしな」

龍護がどうつてことないとでも言つよつた口調で説明する。悠紀が燕を指に止ませて

「渚が待つてゐるんだ。さつさと終わらせようか」

「杉浦。お前も“珠狩”的だつたのか。そんな気はしてたけど

さ

「恭哉じゃん。私のより戻す氣になつた?」

「なるか、ボケ」

「抹茶のパフェ美味しいな」

「さつ桜、大丈夫?」

渚と千夏以外の全員がいた。先ほどの音は龍護の拳銃から出た音みたいだ。銃口から煙、出てるし。

『“珠守”と“地の珠”的正統継承者の方々』

「よく頑張ったな、桜。喧嘩の経験はあっても戦闘経験がゼロに等しいお前が死なかつたのは上出来だ。しかも大地に傷までつけて」龍護が桜を抱き上げながらそう称賛する。美優は口を覆い、桜の左腕から目を逸らす。出血は治まりかけているが、血に慣れてない者が見るにはきつい光景だ。美優は棒の形をした翠玉色のプレスレットを握り締める。自分に傷を治す力があれば・・・。

大切な人達の傷を癒したい

『ようやく定まつたか。お前の心が』

翠玉色の光が美優を包み、弾ける。そこには翠玉色の棒を持ち、左腕に双葉の紋章が現れた美優と、何故か頭に猫が乗っている。翠玉色の瞳に尾が一本の猫だ。可愛い。

「棒? なんで?」

「さあ? 私にもわかりません」

悠紀が尋ねるが、美優も首を傾げるしか出来ない。翔太が顎に手を当て考え込む。普通救急箱とかじやないのかな? この棒でどう傷を治せつて?

『棒を傷口に当てる』

猫がそう指示する。美優は戸惑いながら棒を桜の傷口に当てる。すると、そこから出てきた淡い緑色の光が桜の傷口を覆っていく。一分後、緑色の光が消えたとき、桜の傷口は塞がつっていた。流れただすの血の跡もない。

『まだ完璧に治癒は終わってないけど、安静にしてればあと一時間ほどで完治するよ。それから浅い傷は治さないから。美優が限界みたいだし』

「すげえ・・・」

感嘆の声を漏らす恭哉。一夜は驚きのあまり口を開けていた。美優は体を襲う激痛に顔を歪ませる。そのまま地に手をつけ、倒れないように体を支える。一夜がおろおろしながら美優の体を支える。龍護は敵と睨みあいながら

「お前らも加勢しろよ」

と文句を言う。悠紀はめんぐくそうに立ち上がり、剣を呼び出す。空色の燕もいる。桜は頭を押さえつつ起き上がり

「あれ？ 傷がない。夢だったのか」

等と寝ぼけたことを言うので、恭哉が一発殴り

「現実だ。寝言は寝てから言え。アホ」

「んだと・・・表に出る。バカ」

「ここ一応表だし。いや、結界の中か」

翔太が冷静に突っ込むが、一人はまったく聞いていない。ぎやあぎやあと小学生レベルの喧嘩を展開する一人。

「こんなとこでも始めるんだ。アホ喧嘩」

翔太が呆れまじりの笑みを浮かべる。美優は激痛のため会話に入れません。

「ここはいつたん退きますか。この人数相手じゃきついし」

「贊せ〜い」

亜衣莉が紐を空に放つと、一人を包みこんでいく。紐の隙間から見えた大地の口が動いた。

「また、学校で」

「待て！」

翔太が叫ぶが、二人の姿はもうなかつた。翔太は悔しげに舌打ちをし、腹いせに結界を壊す。喧騒が戻ってきた。血の跡や抉れた地面も元通りになつていて、桜達がさつきいたのは現世とは別の場所、似て非なる場所にいたのだ。

「さつさと戻るか」

龍護の声で全員は動き出した。

「遅い。いつまでもたもたしてたのさ」

渚が元気よく叱り付ける。悠紀が何度も謝っている。他の人は無視し、焼きそばを食べている。美優は横たわり、苦しそうにしている。

「そういえば滅茶苦茶腹減つてたんだっけ、私」

焼きそばを食べつつしみじみしている桜。横にお座りしている紅桜が何度も頷き

『そりやそうだろう。紅から聞いたぞ。お前体力ほんどのない時に操力使つたんだって？下手したら死ぬぞ。まあ普通は使えないはずなんだがな・・・よく操力にまわすスタミナがあつたな』

「結果オーライって事でいいじゃん」

まだふらふらするのか頭を押さえつつニコッとした笑う桜。美優の治癒能力は傷は治すが、流れた血までは戻らないのだ。紅は心配そうに左右の腕を見る。両腕とも傷は綺麗に塞がっている。浅い切り傷は残っているが。だが、あんまり暴れると傷口が開くつて言つてたよね。桜が暴れないとか想像出来ない。

『大人しくしててつて言つても聞かないんだろうな』

紅は諦めまじりの声で桜を見上げる。大事な主人の無茶を止めるのが私の役目。無駄だらうけど頑張ろう。

紅の決意は露知らず、桜は焼きそばの容器をゴミ箱に捨て

「傷も治つたし、腹も膨れだし、プール行こっと」

何を言い出すんだこいつは。渚と千夏以外の心の声が一致した。龍護は苦笑するしかないと言つた様子だ。紅は猛然と抗議する。

『なに言つてるんですか！？あの猫の言葉聞いてたでしょ！！？安静にしてないと傷が開くつて言つてたんですよ。このプールをO型の血で赤く染める気ですか？！？一般人卒倒しますよ！おまけに出血多量で死にますよ。あ・ん・せ・いにしててください！』

「紅は心配性だな。大丈夫だつて」

『いいえ、彼女は正しいわ。あなたの体は体力・氣力共々限界に達している。安静にしてないと傷が開いて死ぬわよ？』

「そんな事知るか。私はプールに行きたから行く。それだけだ」

きつぱり言い切る。自分の体の事などまつたく氣にしてない。いや、むしろ自分から捨てている気が……。

『アホですか！いくら自分が嫌いだからって無茶しそぎです』
桜の顔が微かに歪んだ。すぐに俯いてしまったので付き合いの短い渚と悠紀にはわからないほどの変化だが、龍護達は見逃さなかつた。理由を知っている龍護と翔太と恭哉は暗い顔で俯く。一夜と千夏はさりげなく悠紀と渚をその場所から離す。美優はだいたいは知っているので顔を背ける。

「…………私の体をどうしようが……私の勝手でしょ」
返答が不自然なほど遅かった。俯いているので表情はわからないが、その声には隠し切れない悲しみと自責の念がこもっていた。紅ははつとした顔で謝る。

『ごめんなさい…………』

「…………なに…………謝つてんのぞ。…………別に氣にしてないって」

桜は顔を上げた。そこにあるのはいつも通りの笑顔だった。もちろんいつも通りの笑顔のはずがない。作り笑いだ。紅桜は見てられないう風に顔を背ける。龍護は何か言いたそうに口を開くが、結局何も言わず黙り込む。恭哉は桜の肩に手を伸ばすが、途中でそのまま手を降ろす。

「ちょっと顔、洗つてきます」

そのままの笑顔で立ち上がり、しっかりと足取りで歩いていく。恭哉が後を追おうとしたが、翔太に止められ立ち止くる。

「まだ引き摺つてたのか…………」

「当然だろ。あんなに懐いてたんだから」

「あの時あの高校生さえ来なけりや…………」

「桜ちゃん…………」

四人は重いため息を吐き出す。

桜（と龍護）は一度、大切な人を亡く（失く）している。

一度目は桜の本当の兄、天空 慧斗。二度目は両親とその他の天空家のの人達。

慧斗は桜の一つ年上で、龍護とは同じ年だった。優しく、面倒見がよかつた慧斗に、桜はいつもついていっていた。兄妹仲もよく、たまに喧嘩はしてもすぐに仲直りしていた。龍護とは悪友で、三珠町ではちょっとした問題児だった。

だが、嫌われていたわけではなく町民からも天空家のの人達にも好かれていた。そして、慧斗は“空の珠”的正統継承者だった。才能にも恵まれ、五歳の頃には操力も心力も扱えるようになっていた。誰もが慧斗が珠を受け継ぐと信じて疑わなかつた。

あの事件が、起きるまでは・・・

「あの日の事を死ぬほど後悔しているのは俺ではなく、桜だろうな。
・・・・・桜曰く、自分のせいで自分の兄を失くしたのだから」

龍護が固い声で呟く。

第十一章 慧斗（前書き）

ひらひらと雪が舞っている
触ることを躊躇つてしまつまど美しく、真っ白で、花のよみがえり
い落ちてくる雪

子供の頃はまだ綺麗だな、としか思わなかつた

今になつて思うと触ることを躊躇つてしまふのではなく、触れら
れないのではないか

触れたら最後、僥く夢のように跡形もなく消えてしまふ気がするから

まるで、最初からなにもなかつたかのよ

第十一章 慧斗

「いつでもま～す」

「待つてよ、桜。抱忘れてる。手ぶらで行く気?」

「持ってきて～慧斗。・・・あつ、雪が降つてる。もう十一月だもんね」

「二人とも俺を置いてくなつて。行つてきます、母さん」

「行つてらつしゃい。氣をつけてね」

桜、七歳。慧斗、九歳。龍護、九歳。

今日は小学校の終業式。めんどくさいが行かないダメらしい。そんな事のために行くより寝てたいんだけど。

「慧兄見て。雪だるま」

階段に積もつた雪を丸めて真紅の瞳と髪は薄い黒髪の慧斗に差し出す桜。ほんとそつくりの兄妹だ。だが似てない所もある。桜は見るために強気そうなのに対し、慧斗は一秒で倒せそうな外見。だが、こう見えて俺より強い。認めたくないけど。

慧斗は優しく微笑んで

「上手に出来たね。さすが桜」

わしゃわしゃと頭を撫でられ桜は朝から～機嫌だ。桜はホント慧斗が好きだよな。まあ俺も良い奴とは思つてるけど。というか大親友だし。

「龍兄、雪合戦しよ」

無邪気な声で抱きついてくる桜。俺は指を鳴らし

「いいぜ。受けて立つ」

「何で指鳴らしてるわけ?別に喧嘩するわけじやあるまいし」

慧斗が呆れたような顔でこちらを見てくる。俺は早速雪を固く丸めながら

「うつせーな。なんとなくだよ。な・ん・と・な・く」

「どうでも良いけど桜に怪我させないようにな。知ってるよ。龍、

この間桜を背負い投げしたんだって？翔が教えてくれたよ。背中に青あざ出来てたよ。もう少し手加減してあげようとか思わないの？桜、女の子なんだよ？わかつてる？」

翔の奴、慧斗にチクリやがつたのか。後でぶつ飛ばす。心中の中で密かにそう決め、桜に雪玉を投げつつわざとらじこくそつぼを向き

「何のことかな。さつぱりわかんない。うおっと、危ね」

「余所見すんな。馬鹿龍兄」

桜は舌を出し、生意氣にもそんな事をほざく。俺の中でどつかが派手にぶち切れた音がした。

「んだと・・・ツ」

「翔に聞けばすぐにわかるや。つて聞いてないか。あつ、翔、千夏、一夜、恭、美優、おはよ」

慧斗が手を振る。龍護は後ろに田を向ける。そこには待ちくたびれたといった感じの恭哉と翔太と瞳が紅く髪が茶髪の恭哉の兄、来哉に嬉しそうに顔を綻ばせる千夏と美優、悴んだ指先に息を吹きかけている一夜がいた。

「おはよう、翔兄、千夏、美優、一夜、来兄、おまけの恭哉」

「おはよう、桜ちゃん」「はよつす、桜」「おはよう、桜ちゃん。朝から元気だね」「おはよう」「おひさします」「おふあよ」

千夏と美優は控えめな笑顔を浮かべて小さく手を振る。別に彼女達の性格が控えめなのではなく、寒さのためだろう。動くと隙間から風が入つてくるから。男性陣は一夜を除く全員が氣だるげに大あくびをする。

「誰がおまけだ。チビ桜が」

「何だと・・・弱虫恭哉のくせに」

「やるか」

「かかるとい」

「ふつ一人とも・・・喧嘩はだ『うるさい』黙つてろ、一夜』「ひ

い」

一夜は情けない悲鳴を上げ、慧斗の後ろに隠れる。桜は恭哉は互いに睨み合い、いつでも動けるように構える。いきなり喧嘩をしそうな二人の間に慧斗が割り込み

「はいはい。喧嘩しないの」

「はい、慧兄」「ちつ」

桜は素直に従い、恭哉は舌打ちしながら歩いていく。腹いせに積もった雪を蹴り飛ばしている。恭哉はなかなかの低血圧らしいので朝はとつても機嫌が悪い。なので朝は触らぬ恭哉に祟りなしつて事で全員心得ている・・・のだが桜だけは全くわかつてない。

「ふあ～あ。眠つ。そして寒い」

翔太がそう愚痴り、マフラーを弄る。龍護はそのマフラーを奪い「これで眠気も吹っ飛んだだろ」

「寒つ・・・なにしゃがんだ！龍、さつさと返せ。凍え死ぬ」

「あつはつは。なにその格好・・・くつ苦し・・・」

来哉が翔太の格好を指差し大爆笑する。来哉が笑っている格好というのは、翔太が冷たくなつていいく首に手袋を巻いて、その手袋についていた雪が背中に入り、暴れまわっていることだ。

残念ながらその行為は更に首の熱を奪つていいくだけだつた。

千夏が心の底から呆れたようにはあ～とふか～いため息をつく。ダメな兄を持つと妹はいろいろ大変だな。

「お兄ちゃん。みつともないから暴れまわらないで。龍護兄から奪い返せば良いじゃん」

「そうだね。それがあつたが」

「今頃かよ」

「気がつかなかつたんだ・・・逆にそつちに驚きだよ」

慧斗は苦笑いを浮かべ、頭を搔く。

あつかんべ～をし、自分の尻を叩いて翔太を挑発する龍護。もともと気が短い翔太は容易くこの挑発に乗つた。

「ボツコボコにしてやる！」

龍護と翔太の追いかけっこが始まり、来哉は「俺も入れて～」と言

い、追いかけっこに途中参加。慧斗は唇の端を引き攣らせながら「はあ～、結局こうなつちやうわけね。朝っぱらから元気すぎでしょ」

「慧斗は混じらないのか？」

恭哉が慧斗を見上げる。慧斗はうんと唸り

「混ざつてもいいんだけどね。俺はどうち側につけば良いのか迷うからむ。中立を貫こうかな」と

それに喧嘩も暴力も嫌いだし、と付け加える。桜は目をキラキラさせながら慧斗を見つめている。憧れの男性を見る少女のよつだ。まんまなんだけどね、桜は。

美優と千夏は顔を見合わせ、やれやれと首を振る。

あの頃は全てが輝いて見えた

キラキラと輝き、一瞬で消えてしまつ色とりどりの打ち上げ花火
その一瞬を少しでも長く楽しもうとはしゃいでいた毎日
あの日までは・・・

「では今日から冬休みです。怪我をしないよつにね。解散」

先生の声で生徒達は各自の計画を友達と一緒に話し出す。桜達は素早く鞄を背負い、教室から出る。こつものあの秘密基地？へ行くのだ。

「おー、さつわと走れよ。のりま」

「黙れ、アホなす」

言い合いながらとんでもないスピードで走つていぐ一人。その後を美優と千夏と一夜が追いかける。下駄箱で上履きを脱ぎ、恭哉が靴を出そうと開けると

ドサドサドサ

山のよつなラブレターが雪崩のよつに落ちてきた。桜は引き攣った笑みでそれらを眺め、一言

「いつもの事だけど龍兄と慧兄と翔兄と来兄に負けず劣らず凄い人

「気だね。また全部捨てんの？」

「俺には好きな奴がいるから。そいつ以外眼中にない」
きつぱり言い切り近くにあつたゴミ箱に捨ててくれ恭哉。千夏が小声で「読む位してあげても・・・」と言つてゐるが無視する。
「さつさと行かないと兄貴達に怒られるな」

「そだね。行こう」

「おつ来た来た。お~い、こつちだ」

ここは廃ビル。何十年も前に使われなくなつた人の寄り付かない場所だ。子供にとつては遊び場所以外の何物でもない。

「今日はなにして遊ぶ? かくれんぼ? 鬼ごっこ?」

翔太は鞄をそこらに放り投げながら皆に聞くと、桜が元気よく手を上げ

「両方合わせて隠れ鬼」

「決定」

てなわけで、鬼が一夜と千夏。隠れる方が桜、美優、恭哉、来哉、慧斗、翔太、龍護という面子だ。隠れる方は早速逃げる。鬼は一分待ち、探し始める。

一時間後。龍護、慧斗、桜以外の全員が見つかり、鬼は集まつて作戦会議開始。

「どうする? あの三人ホントに隠れるの上手いよね」

「でも隠れられそうなとこ全部探したじやん。いつたいどこに隠れられるって言うのぞ」

「そんなの本人に聞きなよ」

「その本人が見つかんないから今ここで言い合ひしてるんじゃないの?」

「確かに」

「おい。何だ、お前ら」

後ろを見ると、高校生ぐらいの男数名が偉そくに立つてゐた。

恭哉と来哉と翔太はうざさうに顔を顰める。あからさまに嫌そうな

表情だ。美優と千夏は少しも動じず、お茶を飲んでいる。一夜はあわわしている。見ていて可哀想なほどだ。

「こには俺らのたまり場なんだが、なんでここにこんなガキがいるんだ」

男その一はペッシュとつばを吐き、上から見下ろす。翔太は拳を握り締め、喧嘩を売る。

「お前らこそなんなんだよー。こには俺らの遊び場だ。もっさと出でけ。デカブツ」

「何故デカブツ？そこまで大きくないと思つけど。まつ、同意見だよ」

「デカブツじゃねえよ。高校生様だ。年上には敬意を払え。クソ餓鬼共」

「高校生？腕試しにはちょうどいい相手だ。見掛け倒しじゃないと祈るよ」

来哉と恭哉がポキポキ指を鳴らしつつ不敵な笑みを浮かべる。喧嘩に関して言えば彼らの右に出るものはない。少なくとも中学生の不良は今まで何度も叩きのめしてきた。

翔太は携帯を取り出し、まだ見つかっていない三人にメールを送る。来哉は美優と千夏を後ろに下がらせる。この二人に怪我させたら後々面倒な事になる。約一名が烈火の如く怒り狂うのが容易に想像できる。一夜がその二人の前に立つ。

「餓鬼のくせに俺らに勝てると思つてんのか！？」

男その一は携帯を弄つていて翔太に殴り掛かる。顔には「余裕」と書いてあり、自分がやられる可能性などこれっぽっちも考えていないようだ。

翔太は男その一の拳をまったく見ずに避ける。高校生達の顔に驚きが宿る。

「遅すぎる。龍の拳の方が千倍速いつー！」

叱声と共に蹴りを放つ。蹴り足は正確に男その一の腹に命中。男その一は腹を押さえ蹲る。苦しげに咳き込む男その一を見、高校生達

はぽかんとしている。田の前の現状に頭が追いついていないらしい。
それもそうだろう。

おそらく、この高校生達は今の今まで無敵を誇ってきたのだろう。
それなのにこんな子供にたった一撃でやられるとは夢にも思わない
出来事だった、とうところかな。

「弱いっ。それでも高校生かよ。体ばつか大きくたって意味ないんだよ」

よく通る声で言い放つ。来哉は何がおかしいのか大爆笑している。

「なつ何なんだ・・・こいつら」

高校生達はざわめきつつ一步後ずさる。そこへ

「翔、こいつらか？俺らの邪魔する奴らってのは」

「わあ〜い。喧嘩だ、喧嘩」

「桜、喧嘩ぐらいでそんなにはしゃがない」

龍護達だ。来哉は腰に手を当て、早速文句。

「遅い。どこに隠れてたんだよ、つたく」

「お前には一生わかんない場所だよ」

龍護は挑発的に言い、来哉は「あ、あ」と額に青筋を浮かべている。
ぎやあぎやあ罵り合いながら喧嘩勃発。翔太も加わり、大変やかましい。

「はいは〜い。お静かに、三人とも」

慧斗が三人の頭に順に拳を落とす。

「痛つって〜」×三

三人は頭を押さえ、しゃがみ込む。痛みが治まつたら、猛然と抗議する。

「なにしやがんだ！慧斗ッ！」

「喧嘩売つてんのか？」

「ぶん殴つてやるつ」

三人の抗議を軽く聞き流し、慧斗は高校生に向き直る。そして人当たりのよい笑顔を浮かべて

「素直に退いてもらえませんか？俺らが先に来て遊んでいたので」

「退く訳ね〜だろ」「う

男その一は慧斗に襲い掛かる。どうせ「ひ弱な」ことなら倒せる」とでも思つてゐるのだろうけど・・・。

「残念です」

ふうとため息をつき、慧斗は男の田を見据え、拳の軌道をそらす。男その一は「な・・・に・・」と驚きの声を漏らす。慧斗はそのまま男の足を払いバランスを崩すと、担ぐようにして背中越しに投げる。男その一の体は綺麗に回転し、コンクリートの床に叩きつけられた。

第十一章 兄妹の思い

「が・・・はつ」

男その一は口から血を吐きピクリとも動かなくなつた。気絶したらしい。慧斗はパンパンと埃を払い、何事もなかつたかのように二口ツと微笑む。その笑みはいつも小学校の女子を惹きつける魅力的な笑みだ。簡単に言うと三珠小学校の四分の一の女子をオトした笑みだ（本人無自覚。ゆえに余計にたちが悪い）。龍護曰く、「慧斗は年齢を問わず女性を惹きつけるタイプ」らしい。

恭哉がひゅうと口笛を吹く。さすが慧斗。

高校生達は顎が外れそうなほど口を開き、驚きを露にする。
「お一人様、お～しまい。だね」

龍護は笑いを噛み締めつつ宣告。来哉は慧斗の肩を抱き

「人を見た目で判断しちゃダメだよ。こいつ、俺らん中で一番強いから」

「慧兄、カツコいい」

瞳をキラキラ輝かせ、桜が手を叩く。慧斗は桜の頭に手を乗せ、嬉しそうに破顔する。妹に褒められるのは嬉しいみたいだ。

「ちつ・・・・くしょお」

男その三、その四が同時に桜田掛けて走つてくる。女なら、と考えたのかな？

「でも」翔太が小さく呟く。

彼らはわかつてないのだ。来哉が言つた意味を。

「桜は」恭哉が軽い口調で歌うように続ける。

桜は流れるような動作で男その三の蹴りを避け、男その四のパンチをかわす。まるで踊つてゐるみたいに軽やかに。

「俺らの中へ」来哉が腕を組み、慧斗に寄りかかりつつ哀れみの眼差しを送る。

男その三、その四が泳いだ隙を見逃さず、桜は深呼吸をする。

「かなり」龍護が暇そうに欠伸をする。

「はツ」

裂帛の気合と共に男その三の腹に蹴りを入れる。そして軸足を変え、反対の足で男その四の男の急所部分を蹴り上げる。蹴り足が震んで見える蹴りを、容赦なく、思いつきり。

「強いんだなあ」慧斗が苦笑しつつ締め括る。

ドサドサ

「あれ？もう終わり？一夜より弱いじゃん。準備運動にもならない息一つ乱さず腰に手を当てる桜。

「いや、一夜も結構強いぞ。気が弱いだけで」

恭哉がな、と一夜に問いかける。一夜は「そつ・・・そんな。僕なんか弱すぎでいつも皆にやられてるよ」と小さな声で言っている。

「だから言つたじやん。人は見た目で判断しちゃダメだつて」

来哉がやれやれと肩を竦める。慧斗は桜の頭を優しく撫でて「すごいいじやん、桜。今の蹴り足、俺でも目で追えなかつたよ。俺が教えた技、もう使えるようになつたんだ」

「まだまだだよ。私、もつと強くなつて皆を守りたいんだ」

綺麗な笑みを浮かべ腕を叩く桜。残された高校生六人はいつせいに襲い掛かつて来た。最初に倒れた男その一が復活したから七人か。桜達は毎日喧嘩し合つて鍛えた動きで高校生を圧倒する。

「くそつ」

男その六が折りたたみ式ナイフのようなものを取り出す。それなら、他の高校生達もナイフやカッター や金属バットを出す。

「刃物か・・・厄介だな」

七人は背中合わせになりながら顔を合わせる。汚い奴らめ。

「じゃあ俺らも」「本気で行きますか」「賛成」「ぼつ・・・僕、緊張してきた」「大丈夫。一夜なら出来るよ。自信持ちな」「桜、どつちが早く倒せるか競争な」「いいよ。恭哉には負けない」「言ってろ」

七人は落ちている鉄の棒を拾い、構える。桜達は全員、自分の身を

守る護身術の類は一通り叩き込まれている。しかも実際に毎日ビシバシしごかれている。そんじゅうそこらの子供と思っていたら、痛い目を見ることが間違いなし。

「おりやあ

高校生達が斬りかかってくる。それを受け止め、弾き返し、反撃する桜達。

「へえ、これがナイフか。ちっちゃい刀だね。こんなでホントに斬れるわけ？」

「桜！ 一夜を・・・」

慧斗の焦ったような声が響く。視線を向けると、一夜が床に倒れている。頭から血を流していて、相手は一番大柄でいかにも悪そうな奴だ。こいつがリーダーだらう。男その十としておこいつ。

「一夜ツ！」

美優と千夏の叫びが反響する。桜は渾身の力で男その七のナイフを押し返す。慧斗達はそれぞの相手に押さえ込まれている。いくら武術に長けていても筋力が違います。五人とも必死に耐えている。

桜は一夜目掛けて振り下ろされた金属バットを、すんでのとこりで受け止める。のはいいが、ぐいぐい押してくる馬鹿力に歯を食い縛る。なんて力だ。

「後ろ！」

翔太の警告する声が耳に届く前に後ろを見る。男その七が迫ってきている。この体勢じゃ、避けられない。桜は一夜に呼びかける。

「一夜、あいつのナイフ、止めて。私は、この男のバット押さえているだけで、精一杯なんだ」

「わっ・・かつた」

一夜は血が目に入らないように片目を瞑つたまま体を起こし、男その七の刃を受け止める。僅かな幅しか持たない鉄の棒で刃を受け止めるとは、さすがだ。そして鉄の棒で相手のナイフを絡め取り、弾く。そのままの勢いで相手の腹に鉄の棒を叩き込む。「てめえら・・

・。調子に、のんな！」

一夜を蹴り飛ばし、桜の胸倉を掴み持ち上げる男その十。桜は呼吸が上手く出来ず、男の手を引っ搔くがまったく効果なし。「ぐ・・・つ・・そ・・・離・・・・・・・・・・・・・・」

桜が苦しげに顔を歪ませる。

「桜つ！」

慧斗の声が遠くから聞こえる。

「桜を・・・・離せッ！」

「いいぜ」

男その十は桜の胸倉を掴んだまま窓の外に手を出す。その後何をする気なのかは全員、嫌でもわかった。「まさか・・・・・離してやるよ」

『つ・・・やめろおおおッ！――』

慧斗達の絶叫が木靈す。男その十は残酷な笑みを浮かべ、手を離す。ここは五階。よほど運がない限り、死は免れない。慧斗が男その八をふつ飛ばし、走る。だが、到底間に合ひ距離じやない。

ガシッ

桜が必死に手を伸ばし、窓枠を掴む。

「ちッ、しふてえ餓鬼だな」

男その十は桜の手を窓枠から無理矢理引き剥がす。その隙に慧斗は男その十の頸に一発入れ、桜に手を伸ばす。

「桜、掴め！」

「慧兄・・・・！」

桜が空に手を伸ばす。慧斗は限界まで身を乗り出し、手を伸ばす。伸ばした手が一瞬指先に触れて、しかし届かず空を掴む。いや、届かなかつたのではない。桜が自分の意思で手を引いたのだ。慧斗が一緒に落ちないように。

「こんなときまで・・・人の心配してんなよ」

乾いた笑みと共に慧斗は窓枠を蹴り、外に飛び出す。

心に浮かぶのは、いつも自分の後を追ってくる小さな妹の笑顔。

守りたいんだ。あいつは俺の大事な……誰よりも大切な……この世にたつた一人しかいないつ……俺の、妹なんだ

『それが、そなたの望みなら』

再び伸ばした手は、桜の手を掴み取る。そのまま桜を抱きしめ落下していく。その二人を真紅の光が包み込む。それと同時に、慧斗の胸元から淡い光が溢れ出す。

「俺が、護る」

龍護達が下を覗き込んだとき、慧斗の姿だけがなかつた。

「美優と千夏は救急車を呼べ。来哉は親父達に連絡を」

翔太が指示を出す。その指示に従い、それぞれが動く。高校生達は全員叩きのめしてある。邪魔する者はいない。

残った桜達は慧斗を探すことになつた。だが、影も形もなかつた。残つたのは“空の珠”のみ。

どくん

桜の体内で何かが脈打つ。瞳から一粒の涙が零れ落ちる。

私のせいだ、慧兄は・・・

桜の中で何かが壊れる音と共に、抑えきれない感情が、揺れる。あの時、慧兄の手を掴んでいたらこんなことには・・・私の、せいだ。

どっくん

桜の真紅の瞳がひび割れる。

「まずい。桜の力が・・・」

兄の死を引き金に、まだ眠つていなければならぬはずの力が目覚めかけている。

「ダメだ！ 今のお前がその力を使つたら・・・」

命の全てを力に吸い取られてしまう。

桜を中心に地面が陥没し、すさまじい炎の暴風が吹き荒れる。近く

にいた龍護達は慌てて遠ざかる。今の桜にこの力はコントロール出来ない。近くにいたらこっちまで巻き込まれる。

「あつ・・・」

これが桜の力か。全てを焼き尽くし、浄化する劫火。“空の珠”から光が迸る。その光が炎を包み、消滅させる。そのまま桜をも包み、力を抑え込む。

「ど・・・どうなつた・・・?」

恭哉が啞然としている。翔太と龍護も田を瞬くしか出来ない。桜はぐらりと崩れ落ちる。

“空の珠”が桜の暴走を止めた・・・? そんな話、聞いたことないけど

その後、親父達が迎えに来て、一夜は病院に運ばれた。慧斗の事は、今でも探しているが、今のところ見つかっていない。

第十二章 「罪」

「来哉、元気にしてつかな」

重い沈黙を破つたのは翔太の声だつた。龍護は懐かしそうに手を細める。あいつならどこにでも溶け込めるだろ？

あの事件の後、来哉は転校してしまつたのだ。弟の恭哉は天空家に残ることを選んだ。

「あいつの事だ。元気にやつてるだろ？」「

「クソ兄貴なら元気だよ。毎週手紙來てるし」

恭哉は不機嫌丸出しの顔でぼそりと呟く。龍護と翔太は同時に吹きだす。

「お前らまだ兄弟仲悪いのかよ」「

「ダメだな、まったく」

「うつせ。兄貴とはなんとなく合わないんだよ」「

ちつと舌打ちする恭哉。美優がお茶を一口飲み

「あなたが一方的に嫌つてているだけでしょ」

図星のようで美優を睨みつける。龍護は桜が去つた方を見つめて吐息のような声を漏らす。

「桜・・・」

そのとき桜は人気のない場所で膝を抱えていた。

「慧兄・・・」

風に溶けるぐらい小さな声で囁く。大好きな兄の名前。涙が溢れそうになり、唇を噛み締める。あの夜に決めたんだ。絶対に泣かないつて。全部背負つていくつて決めたんだ。それがせめてもの罪滅ぼし。大切な者を守れなかつた自分なりの。

ガン

固いコンクリートを殴りつける。慧斗が消えた時も、天空家の人達が殺された時も、自分は何も出来なかつた。ただ見ていることしか、

出来なかつたのだ。

「情けないッ」

皆は私を助けてくれるのに、何故私は何も出来ない。理由は簡単。自分が弱いからだ。自分が無力だからだ。

助けてもらう事しか出来ない
護つてもらう事しか出来ない

しかもあの時私は伸ばされた手を・・・・・

噛み締めすぎた唇から血が滲む。口の中に鉄の味が広がる。

「私はツ・・・もう何も失くしたくないんだつ。あんな思い・・・・・

・・・・もう一度と味わいたくなハツ！！」

血を吐くような声で叫ぶ。「コンクリートを殴った衝撃で傷口が開いたのか、右腕に痛みが走る。生暖かい血が腕を伝つていく感覚と共に、傷が痛みを訴えるが、無視する。

体の傷より心の傷の方が何倍も痛い。

「こんな私に、生きる価値なんか無いんだよ」

そうだ。こんな私に生きる価値なんて、ない。まして命を懸けて護られる価値なんか欠片もない。

しばらくそうやつていると気分も落ち着いてきた。桜は一、三度深呼吸をし、頬を叩く。そもそも戻らないと龍護に怒られる。立ち上がりうと膝に力を込めた瞬間

「・・・・つ桜・・・・」

ゆっくり振り向くと、恭哉が荒い呼吸を繰り返しながら立っていた。

「・・・・っんで・・・・」

ここに。と声にならない声で呟く。恭哉は桜の隣に乱暴に腰を下ろし、桜の頭をぐしゃぐしゃかき回す。そして独り言のようご呟く。

「自分の事が、許せないか

「うん」

許せないとも。大切な人も守れもせず自分だけ生きて（ここに）いる事が。

あの時伸ばされた手を掴まなかつた自分が。

「自分のせいだと、思つてゐるのか」

「・・・うん」

自分のせいだとも。あの時私が慧兄の手を取らなかつたから慧兄はいなくなつてしまつた。

「自分の事、嫌いか」

「・・・うん」

嫌いに決まつてゐる。大事な人一人救えないと自分が

「自分の事、憎いか」

「・・・うん」

憎いとも。大切な人を犠牲にして生きている自分が

「自分だけ生きてゐるのが、辛いのか」

「・・・う・・ん・・」

辛いとも。ずっと一緒にいるのだと信じて疑わなかつた大切な人に、もう会えないことが。

「苦しいか」

「・・・つん・・」

苦しいとも。大切な人を失う原因になつたのが自分にあるという事実が。

その「罪」と向き合つていかなければいけない事が。

恭哉は優しく桜の頭を撫で、抱きしめる。

「ただの過ちに「罪」なんて名前をつけて苦しまなくともいいんじやないのか。あの時お前は慧斗を助けたかつたんだろ？一緒に落ちるかもしれないから伸ばされた手を掴まなかつたんだろ？」

「わからない。でも結果的に慧兄は私を助けようとしていなくなつたのは事実。だからこれは私が背負うべき「罪」なんだよ」

桜は何かを押し殺すように口元を覆う。声が震えている。恭哉は優しい声で一言一言言い聞かすように

「全部一人で背負うな。お前には味方がたくさんいるだろ？」

カッコいい俺様とか超マイペースな幼馴染とかいつもは気弱なのによる時はやる奴とか口は悪いけどいつもお前の傍にいる兄貴とか俺

は嫌いだけど笑い上戸の馬鹿兄貴とか腹黒でいつも冷静なアイツとかそのアイツにベタ甘な彼氏さんとか料理が上手い柔らかい雰囲気纏つた奴とかお前の兄貴と超仲良しなアホもいる

気がついたら泣いていた。おかしいな。泣かないって、決めたのに。

自分の腕の中で微かに震える体を更に強く抱きしめる。いつもはあんなに強気なのに今はこんなにも頼りない。

「泣け。今までよく一人で耐えてきたよ、お前。これからは一人で背負わなくともいいんだ。周りの奴にも少しづつ押し付けろ」

幼子をあやすように嗚咽を押し殺しながら泣きじゃくる桜の背中を擦る。

「泣いてすつきついたら、戻ろう？ 皆心配してると」

「・・・心配・・・・？」

「もしかして自分なんか心配されるわけない、とか思つてる？」

黙つて頷く桜。恭哉は笑みを零し、桜の頭をぽんぽん叩く。

「お前は自己評価低過ぎだよ」

「お待たせ」

「遅かつたじやねえか。どこの道草食つてたんだ？」

龍護が暇そうに寝転がっていた。桜は寝転がっている龍護を踏み「『めん。キヅカナカツタ。それから道に生えてる草なんか食えるか』

「ふざけんな！ ぶん殴つてやる」

いきなり喧嘩を始めそうな一人に平和そうな声が割つて入る。

「いつそ見事なほど棒読みだね。それから道草を食うつていうのは喻えであつて、何も本物の道草を食うつてことじやないよ」
美優が猫と共にくつろぎながら説明する。龍護はやる気が失せたのか、再び寝転がる。猫は呆れたような顔をして

『そんな事より怪我の手当ででもしてあげなさいよ。傷、開いてるわよ』

「言われてみれば・・・」

美優は今氣づいたと言わんばかりの態度で棒を呼び出す。猫は一振りの尻尾を巧みに操り、桜の右腕を引き寄せる。

「気分はどうだ？」

翔太が心配そうな表情で桜の顔を覗き込む。桜は作り笑いではなく、素の笑顔で

「悪くない」

その後、「男と遊んでるから先帰つて」という琉璃を置いて、三珠駅からの帰り道。渚と悠紀は桜に対して微妙に気まずそうにしていた。まあ無理もない。彼らが桜達と出会つたのは中学の時。それ以降のことは知らないのだ。その過去で悩んでいる桜になんと声をかけたら言いのか、わからないでいるのだ。

「もうすぐ夏休みだ。寝まくるぞ」

ガツツポーズをして張り切つている翔太。千夏は「部活は?」と苦笑いしつつ聞くと、はつきり「サボる」という返答が返つってきた。おいおい……。

「今年も俺ん家の別荘に行こい。毎年恒例だし」

「行く行く」

桜は満面の笑みではしゃぎまくる。子供みたいだ。真紅の瞳が夕日を受け、キラキラ光る。

「可愛い」

恭哉は思わずつといつた感じで咳き、慌てて口を塞ぐ。桜には聞こえなかつたみたいだ。ほつと安堵のため息をついていると、前後左右から視線が突き刺さる。恐る恐る見回すと、美優以外の全員がニヤニヤしている。特に悠紀はニヤニヤどころではなく「どう弄つてやろうかな」的な嫌な笑みだ。

「なつなんだ・・・よ・・・」

語尾が力なくしぶんしていく。渚は自慢げに胸を張り

「琉璃の勘が当たつたね」

「恭哉。桜の事好きなんだろ?」

悠紀が笑いを噛み殺しながら問う。恭哉は顔を真っ赤に染め

「ちつ違……」

「顔、赤いよ?」

「ゆつ・・・ゆゆ夕田のせいだ!」

どもつてゐし。どつからどう見ても夕田のせことは思えないほど赤い恭哉の頬。その頬をつんづん突く悠紀。

龍護はうんうん頷きながら恭哉の肩を叩き

「わかつてゐ。わかつてゐよ、恭」

「龍先輩」

やつと理解者が來てくれた、と言わんばかりの表情で龍護を見上げる恭哉。龍護は頷きつつ

「お前が桜を好きな事ぐらい昔から知つてゐ。今更隠すことなんかないぞ」

「違つつつてんだね!」

「?何が?」

桜が不審げに眉根を寄せ、振り返る。恭哉はしまった、とでかでかと書いてある顔を背け、脳をフル回転させる。言い訳を考える。考えるんだ、俺!

「成績の話をしてたんだよ。なつ、恭」

翔太が恭哉の頭を押さえつけ、同意を求める。恭哉は小さく「そ・・・

・そ�だ」と答える。

「そつ、ならいいけど。もつと静かに話してよ」

顔は見えないが、納得したようだ。無意識に止めていた息を吐き出す。

「すまんすまん」

龍護が笑顔で謝る。桜は美優と千夏と渚との会話に戻る。桜以外の女子三人の口元が綻んでいる気がしなくもないが、気のせいということにしておこう。

「で、本心は?」

からかいの色を消し、真剣な眼差しで聞いてくる龍護。恭哉は意味

なく髪をぐしゃぐしゃかき回し、少し震えた声で

「好きだよ。昔から好きだった」

そう言つた後、照れ臭そうにそっぽを向く。顔が更に赤くなつてい
る。悠紀は積年の恨み、今晴らすときとばかりに

「照れてる。可愛いや、恭うやん」

「誰が恭ちゃんだ……埋めるぞ、口火」

「きよ・・・恭哉君・・・・・落ち着いて」

一夜が祛えつつも恭哉を押される。恭哉は悠然

桜は眉間にしわを寄せて

「静かにじゅうて・・・・・・・・・じゅうてんだらうがー。」

「JR東日本」

一夜が怯えながら謝る。恭哉は拳を振り上げた格好のまま固まる。静かになつたのを確認すると桜は女子三人との会話に戻る。

(やつぱ桜は怖い)

第十四章

三連休明けの火曜日。思わぬ人物がこの私立三珠大学付属三珠高等学校にやつてきた。

「ここは2Eの教室。龍護と翔太のクラスだ。

「今日は転校生を紹介します」

入ってきて、という担任の声と共にドアの開く音と靴音が耳に入る。龍護は寝ているのでなんの反応もないが、翔太が息を呑む。ちなみに、翔太の席は窓側の一一番前。龍護の席は窓側の後ろから一番目。龍護の席は大変寝心地のよい席で、教師にも見つかりにくい場所なので、寝るのには好都合な場所だ。

「天空 来哉です。よろしくお願ひします」

そこにいたのは昔仲のよかつたあの来哉だ。戻ってきたのか。昔と変わらない紅い瞳に、低い声、金髪の髪が眩しい。ん？ 金髪？ いつの間に染めたんだよ。

『きやーッ！！！ カツ』『いい』

女子共の黄色い悲鳴が上がった。うるさくて来哉の自己紹介が聞こえない。ここはどつかのライブ会場かよ。

翔太は眉間を揉みつつため息をつく。鼓膜が破れそうだ。

『じゃあ天空君は天空 龍護君の後ろね』

おいおい、マジかよ。どつかの漫画じやあるまいしそんな展開はなしにしてくれよ。

ずり落ちそうになるのを堪えながらそう思つていると、来哉がこちらに歩いてきた。すれ違つ瞬間、来哉は声を出さずに口を動かす。久しぶり

翔太は返事の代わりに手を一、二度振る。すると、何を勘違いしたのか女子が手を振り返してきた。山岸 那実なみだ。俺の一番目に嫌いな女子。龍護も嫌いって言つてたつけ？ いつも言い寄つてきてウザイ奴。

山岸を軽く睨みつけ、窓の外を眺める。今日は快晴。良い一日になりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6534w/>

珠巡り

2011年12月1日19時52分発行